

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患 タイプ	食道癌 臨床専門情報(専門医向け)	
タイトル情報	論文の英語タイトル 論文の日本語タイトル	Single-dose brachytherapy versus metal stent placement for the palliation of dysphagia from oesophageal cancer: multicentre randomized trial 食道癌による嚥下障害に対する姑息的治療としての小線源腔内照射と金属ステント留置の比較—多施設共同ランダム化比較試験—	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無 ガイドラインでの目次名称	1.有り 2.無し (1)	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.コホート研究 6.症例対照研究 7.横断研究 8.症例報告 9.その他 (3)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Lancet	
	雑誌 ID		
	巻	364	
	号		
	ページ	1497-1504	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	Oct 2004		
著者情報	筆頭著者	氏名	所属機関
	筆頭著者	Homs MY	Department of Gastroenterology and Hepatology, Erasmus MC/University Medical Centre Rotterdam
	その他著者 1	Steyerberg EW	Department of Public Health, Erasmus MC/University Medical Centre Rotterdam
	その他著者 2	Eijkenboom WMH	Department of Radiotherapy, Erasmus MC/University Medical Centre Rotterdam
	その他著者 3	Tilanus HW	Department of Surgery, Erasmus MC/University Medical Centre Rotterdam
	その他著者 4	Stalpers LJA	Department of Radiotherapy, Academic Medical Centre, Amsterdam
	その他著者 5	Bartelsman FWM	Department of Gastroenterology, Academic Medical Centre, Amsterdam
	その他著者 6	van Lanschot JJB	Department of Surgery, Academic Medical Centre, Amsterdam
	その他著者 7	Wijrdeman HK	Department of Gastroenterology, Rijnstate Hospital, Arnhem
	その他著者 8	省略	
	その他著者 9	省略	
その他著者 10	Siersema PD	Department of Gastroenterology and Hepatology, Erasmus MC/University Medical Centre Rotterdam	

レビュー研究の6項目	目的	食道癌あるいは食道胃接合部癌により生じた食道狭窄に対する、姑息的治療としての小線源腔内照射と金属ステント留置をランダム化比較し、合併症と QOL を検討する。
	データソース	1999年12月より2002年6月まで、9施設で登録された切除不能進行食道癌、あるいは切除不能進行食道胃接合部癌患者 209 例を小線源腔内照射群と金属ステント留置群にランダム化。
	研究の選択 データ抽出	health-related quality of life, visual analogue pain scale, total medical cost
	主な結果	1) ランダム化により、小線源腔内照射群 101 例 (95 例で完遂)、金属ステント留置群 108 例 (105 例で留置可能)。 2) 嚥下困難は金属ステント群で速やかに改善されたものの、長期成績は小線源腔内照射群で有意に良好であった。 3) 合併症発生率は、金属ステント群で有意に高かった (33% vs 21%; p=0.02)。特に後出血の頻度が金属ステント群で有意に高かった (13% vs 5%; p=0.05)。 4) 生存期間や嚥下困難の再発頻度、総治療費については両群間に差がなかった。 5) QOL スコアは、概ね小線源腔内照射群で良好であり、特に治療後の疼痛は小線源腔内照射群で少ない傾向であった。
	結論	食道癌あるいは食道胃接合部癌により生じた食道狭窄に対する姑息的治療としての小線源腔内照射は、長期間嚥下困難の改善をもたらす。小線源腔内照射は、金属ステント留置よりも合併症頻度が有意に少なく、狭窄解除のための姑息的治療として有用である。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	北川雄光
	レビューワーコメント	ランダム化比較試験として、データの質、量ともに信頼性のある論文である。食道狭窄解除のための姑息的治療としての小線源腔内照射を評価する意味で、また安易な金属ステント留置に対する警鐘の意味で重要な論文と考える。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患 タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル 論文の日本語タイトル	Current status of surgery for carcinoma of the hypopharynx and cervical esophagus 下咽頭および頸部食道癌における手術療法の現状	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無 ガイドラインでの目次名称		
書誌情報	研究デザイン	ランダム化比較試験	
	Pubmed ID	11553116	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Dis Esophagus	
	雑誌 ID	14	
	巻	55-97	
	ページ		
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	医学	
	発行年月	2001	
著者情報	筆頭著者	氏名	所属機関
	筆頭著者	Paracchia A	Department of Surgery, University of Milan, Ospedale Maggiore Policlinico IROCS, Milano, Italy
	その他著者 1	Banavina L	
	その他著者 2	Battini M	
	その他著者 3	Parani M	
	その他著者 4	Via A	
	その他著者 5	Saino G	
	その他著者 6		
	目的	下咽頭と頸部食道癌に対する手術療法の有効性の検証	
	データソース	文献情報における1994年～2000年に下咽頭癌と頸部食道癌31例を対象とした。	
	研究の選択	1)入院時における臨床状態の比較がある 2)手術後の臨床経過および手術合併症の状況の比較がある 3)長期予後について調査済みである	
データ抽出	1)最初に化学療法および放射線治療(50Gy/5回)を行った群と化学療法および根治的放射線治療(60Gy/5回)を行った手術可能症例にサブグループ解析を行った群とした。 2)手術不能な症例は内視鏡的に緩和療法を行った。		
主な結果	1)術後合併症の発生率は28.9%で吻合不全が19.2%、再建腸管の壊死、悪性動脈からの出血、呼吸器合併症が3例であった。 2)中間生存期間は19ヶ月で、5年生存率は32%であった。臨床的CR率 complete clinical response(arm1)で25%、arm2で38%であった。 3)サブグループ解析は19例中5例行われ明らかな手術の合併症は起こらなかった。サブグループ解析を行った症例の生存率は1例で88ヶ月、中間生存期間は6ヶ月であった。 4)phase IIIスタディーがなされていないため臨床経過を比較し根治的放射線治療と手術療法との比較は困難である。この点について明らかな決定がなされるであろう。		
備考			
レビューワーコメント	EBMレビューワー氏名	加藤広行	
	EBMレビューワーコメント 医療レビューワー氏名 医療レビューワーコメント	縦断における下咽頭癌と頸部食道癌に対する化学放射線治療ランダム化比較試験である。シノジウムレポートであり具体的なデータが不明瞭である。 下咽頭癌および頸部食道癌に対する手術療法、あるいは化学放射線治療のどちらが最善か？	
クリニカルエッセンス この論文での目録、Medsキーワード	クリニカルエッセンス この論文での目録1	下咽頭癌および頸部食道癌の手術療法における臨床病理学的に予後に影響する因子の検討を行っている。また、手術後の合併症の発生頻度や種類について報告している。尚、合併症頻度に対する相違点およびevidence levelの低い結果は不明瞭である。この論文が提供している情報は臨床経過を比較し根治的放射線治療の選択は明らかな情報と患者の意思にゆだねられるべきである。	
	Medsキーワード1	キーワード 読み(金魚カマ/アルファベット) ガイドライン	
	Medsキーワード2	下咽頭癌	
	Medsキーワード3	頸部食道癌	
	Medsキーワード4	化学放射線治療	
	Medsキーワード5	手術	
	Medsキーワード6	放射線	
	Medsキーワード7	手術	
	Medsキーワード8	手術	
	Medsキーワード9	手術	

論文のタイトル		ジャーナル名	
基本情報	対象疾患		
	タイプ		臨床専門情報
タイトル情報	論文の英語タイトル	Paratracheal lymph node involvement in advanced cancer of the larynx, hypopharynx, and cervical esophagus	
診療ガイドライン情報	論文の日本語タイトル	喉頭・下咽頭・頸部食道癌における気管傍リンパ節転移	
	ガイドラインでの引用有無		
	ガイドラインでの掲載有無		
	研究タイプ		コホート研究
	Pubmed ID		12972940
	医中誌 ID		
	雑誌		Laryngoscope
	巻		113
	号		3
	ページ		1595-1599
	ISSNジャーナル		
	雑誌分野		医学
	国言語		英語
	発行年月		
著者情報	筆頭著者	氏名	所属機関
	筆頭著者1	Timon CV	Department of Otolaryngology-Head and Neck Surgery, St. James's Hospital, Dublin, Ireland
	筆頭著者2	Fener M	
	筆頭著者3	Conlon BJ	
	筆頭著者4		
	目的	喉頭・下咽頭・頸部食道癌における気管傍リンパ節転移頻度の検証	
	データソース	1994年から1998年までに喉頭摘出が行われた30症例を対象とした。1998年・下咽頭・頸部食道癌における標準手術法であること	
	研究の選択	1)すべて年長の著者が手術を行っていること 2)喉頭がんの経路観察がされていること 3)気管傍リンパ節の病変は頸部からのアプローチで可能な限り上段の病変を行う。	
	データ抽出	1)病変の部位、 2)生存期間、 3)リンパ節転移の部位・個数、 4)リンパ節転移の有無・部位・個数、 5)気管傍リンパ節転移の有無・部位・頻度、 6)頸部リンパ節と気管傍リンパ節転移の関係	
レビュー研究の6項目	主な結果	1)平均年齢は63歳(45-83歳)、男性36例、女性14例、喉頭20例、喉頭摘出・頸部食道21例、喉頭摘出・咽頭食道9例であった。 2)遠隔的頸部リンパ節転移は頸部転移の平均個数は両側で17個で、根治的頸部転移では平均個数は片側で32個であった。 3)気管傍リンパ節転移の平均個数は片側で3個であった。 4)リンパ節転移は喉頭がん(80%)にみられ、18例(90%)に気管傍リンパ節転移がみられた(喉頭:20%、喉頭摘出・頸部食道:43%) 5)頸部リンパ節転移陽性で気管傍リンパ節転移陰性症例は5例にみられ、そのうち4例は喉頭摘出・頸部食道症例であった。 6)リンパ節転移の陽性症例で転移性の症例と比較して予後が不良であった。気管傍リンパ節転移症例では転移性症例と比較して予後不良である傾向がみられた。	
	結論	喉頭・下咽頭・頸部食道癌の進行癌では気管傍リンパ節への転移が明らかになった。この領域の進行癌では気管傍リンパ節の標準的なリンパ節転移が必要であるべきだ。	
	備考	対象症例は少なくとも3年以上の経過観察がされているものを対象としている。生存分析ではカプランマイヤー分析を用いており、有意差の検	
	EBMLレビューワー氏名	加藤広行	
レビューワーコメント	EBMLレビューワーコメント	喉頭・下咽頭・頸部食道癌における気管傍リンパ節転移頻度の検証を行ったが、1994年から1998年までの喉頭摘出が行われた30症例を対象にした。そして標準手術法であること、すべて年長の著者が手術を行っていることなどの限定を行い、さらに最低3年の経過観察がされている症例を対象にしており、エビデンスレベルの高い臨床研究であると思	
	疾患レビューワー氏名		
	疾患レビューワーコメント		
クリニカルクエスト	この論文での回答1		
	この論文での回答1	キーワード	読み(全角カタカナ/アルファベット)
	Mindsキーワード1	喉頭癌	コウツウガン
	Mindsキーワード2	下咽頭癌	カインツウガン
	Mindsキーワード3	頸部食道癌	ケイシヨウドウガン
	Mindsキーワード4	外科学	ウカガク
	Mindsキーワード5	喉頭リンパ節転移	キョウリンパセツテンイ
	Mindsキーワード6	頸部リンパ節転移	ケイリンパセツテンイ
	Mindsキーワード7		
	Mindsキーワード8		

論文のタイトル		ジャーナル名	
基本情報	対象疾患		
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Neck and mediastinal node dissection in primary laryngopharyngeal cancer	
診療ガイドライン情報	論文の日本語タイトル	喉頭・咽頭癌における頸部・縦隔リンパ節転移	
	ガイドラインでの引用有無		
	ガイドラインでの掲載有無		
	研究タイプ		コホート研究
	Pubmed ID		11505488
	医中誌 ID		
	雑誌		Head Neck
	巻		Sep. 23
	号		
	ページ		772-779
	ISSNジャーナル		
	雑誌分野		医学
	国言語		英語
	発行年月		2001
著者情報	筆頭著者	氏名	所属機関
	筆頭著者1	Martins AS	Head and Neck Service, Department of Surgery, Faculty of Medical Sciences, State University Of Campinas (Unicamp), Rua Roxo Moreira, No. 1234, Cidade Universitaria, 13082-591, Campinas, Sao
	筆頭著者2		
	筆頭著者3		
	筆頭著者4		
	目的	喉頭・咽頭癌に対する頸部・縦隔リンパ節転移について検討する。	
	データソース	1995年から2000年にかけて、Campinas州立大学病院で、喉頭・咽頭癌の根治手術を行った患者のみの。根治術後生存者のみでいた。喉頭癌・咽頭癌の標準手術法であること、16例が食道癌、14例が下咽頭癌、4例が喉頭癌。また、1991年から1994年までに報告された論文8本。	
	研究の選択	一人の研究が、自己の施設で手術を受けたすべての症例を対象とした。また、1991年から1994年までに報告された論文8本から、今回の検討内容と関係の報告を選択した。	
	データ抽出	1)病変の部位、 2)年齢、性別、 3)TNM staging、 4)術式、手術時間、出血量、 5)頸部・縦隔リンパ節転移、 6)病変・生存率	
レビュー研究の6項目	主な結果	1)25例の頸部転移が19症例に対して行われ、16例(全症例の64%)にリンパ節転移を認めた。 2)喉頭癌、下咽頭癌、食道癌それぞれ、75%、64.2%、18.7%に頸部リンパ節転移を認めた。 3)頸部リンパ節転移については、27例のデータが有効で、うち16例(59.2%)がリンパ節転移と認め、喉頭癌、下咽頭癌、食道癌それぞれ、0%、72.7%、61.5%に頸部リンパ節転移を認めた。 4)喉頭・咽頭癌の根治手術を受けた下咽頭・喉頭癌における頸部転移にはほぼ異論がない。頸部転移における縦隔転移についても同様である。この研究では、食道癌において、縦隔リンパ節転移は18.7%に認められ、今までの報告では、13%-22%。頸部転移と縦隔転移の両方で46.2%と高率であった。縦隔転移の必要性について、さらなるブロッカティブな研究を要する。また、下咽頭癌における縦隔リンパ節転移に関して、この報告では72.7%と、過去の報告を遙かに上回るが、無視できない値であり、さらな	
	結論	喉頭・咽頭癌根治手術における頸部の適応、その意義について検討したものである。頸部の適応については、これまでの報告においても明らかにされており、今後さらなる検討を要する。現在までに報告された結果を合わせ検討し、今後の治療に応用することを期待した論文である。	
	備考		
	EBMLレビューワー氏名	加藤広行	
レビューワーコメント	EBMLレビューワーコメント	喉頭・咽頭癌根治手術における頸部の適応、その意義について検討したものである。頸部の適応については、これまでの報告においても明らかにされており、今後さらなる検討を要する。現在までに報告された結果を合わせ検討し、今後の治療に応用することを期待した論文である。	
	疾患レビューワー氏名		
	疾患レビューワーコメント		
クリニカルクエスト	この論文での回答1		
	この論文での回答1	キーワード	読み(全角カタカナ/アルファベット)
	Mindsキーワード1	喉頭癌	ウツシヨウドウガン
	Mindsキーワード2	下咽頭癌	カインツウガン
	Mindsキーワード3	頸部癌	コウツウガン
	Mindsキーワード4	喉頭癌	ウカガク
	Mindsキーワード5	喉頭リンパ節転移	キョウリンパセツテンイ
	Mindsキーワード6	リンパ節転移	リンパセツテンイ
	Mindsキーワード7		
	Mindsキーワード8		
	Mindsキーワード9		
	Mindsキーワード10		

レビュワー利用フォーム		データ入力欄	
基本情報	対象疾患 タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル 論文の日本語タイトル	Pharyngo-laryngo-esophagectomy and gastric pull-up for post-carcinoid and cervical esophageal squamous cell carcinoma.	嚥下後部・頸部食道癌に対する咽頭嚥頭食道腫瘍および胃管再建術の検証
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無 ガイドラインでの引継ぎ名		
書籍情報	研究ナライン		
	Pubmed ID	12437830	
	医中誌 ID		
	著者名	J Laryngol Otol	
	巻	116	
	ページ	326-330	
	ISSNナンバー	0022-1718	
著者情報	著者	氏名	所属機関
	筆頭著者	Ullah R	Department of Otorhinolaryngology-HNS, Royal Victoria Hospital, Belfast, UK
	その他著者1	Baile N	
	その他著者2	Kinsella J	
	その他著者3	Ankin V	
	その他著者4	Primrose WJ	
	その他著者5	Brooker DS	
レビュワー研究の6項目	目的	嚥下後部・頸部食道における扁平上皮癌に対する咽頭嚥頭食道腫瘍および胃管再建術の有用性の検証	
	データソース	1988年から1997年までに咽頭嚥頭食道腫瘍および胃管再建術を行った26例の症例対照研究	
	研究の選択	1)咽頭嚥頭・頸部食道における局所進行扁平上皮癌であること 2)手術年齢は63.5歳(39-79歳)、男性11例、女性15例、T3が18例、T4が9例、N0が18例、N1が7例、N2が1例であった。 3)15例は喫煙者、5例はアルコール常習者であった。 4)全例が有症状で11例が体重減少をみとめた。 5)多発癌が3例にみられ、4例は術前放射線治療を受けていた。	
	データ抽出	1)年齢、性別、 2)術前治療の有無、 3)手術時間、出血量、入院期間、 4)手術後合併症、 5)手術後の発声状況、 6)リンパ節転移の有無、	
	主な結果	1)手術年齢は63.5歳(39-79歳)、男性11例、女性15例、T3が18例、T4が9例、N0が18例、N1が7例、N2が1例であった。 2)手術の平均時間は5時間(3.5-7.5)で平均出血量は840ml(160-1800)で、ICU平均在院期間は4.2日、入院期間は平均34日(9-84)であった。 3)輸血は平均2.8単位、空腸経管栄養は15日、経鼻胃管チューブは14日であった。 4)ガストログラフィン検査は術後7-10日後に24例行なった。 5)術後死亡は3例で、肺炎、心不全、肺塞栓症であった。術後合併症は24例に認め、血気胸10例、甲状線機能低下症が6例であった。 6)吻合部瘻管5例、吻合部瘻管4例、気管孔瘻管2例にみられた。 7)13例(50%)の患者は再発を認め、頸部リンパ節再発を認めた6例は手術を行ない、3例は非手術であった。 8)3例は現在生存中で、5例は再発なく他病死であった。 9)3例は現性生存中で、5例は再発なく他病死であった。	
	結論	嚥下後部・頸部食道における扁平上皮癌に対する咽頭嚥頭食道腫瘍および胃管再建術は終日摂取を維持させるためには安全で信頼性の高い方法である。	
	備考		
レビュワーコメント	EBMレビュワー氏名	加藤広行	
	EBMレビュワーコメント	嚥下後部・頸部食道における扁平上皮癌に対する咽頭嚥頭食道腫瘍および胃管再建術の有用性を検証した論文である。26例の手術前後の詳細な診断により、咽頭嚥頭食道腫瘍後の再建には胃管再建が安全で信頼性が高いことを示	
クリニカルクエスト、この論文での回答、Mindキーワード	疾患レビュワー氏名		
	クリニカルクエスト1 この論文での回答1	キーワード	読み(全角カナorアルファベット)
	Mindキーワード1	下咽頭癌	カイトウガン
	Mindキーワード2	咽頭嚥頭癌	ケイブツョウガン
	Mindキーワード3	胃管再建	イカンサイケン
	Mindキーワード4	咽頭嚥頭食道腫瘍	イントウコウトウシヨウドウチケンシュツ
	Mindキーワード5	発声	ハッセイ

レビュワー利用フォーム		データ入力欄	
基本情報	対象疾患 タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル 論文の日本語タイトル	Pharyngo-laryngo-esophagectomy and gastric pull-up for post-carcinoid and cervical esophageal squamous cell carcinoma.	嚥下後部・頸部食道癌に対する咽頭嚥頭食道腫瘍および胃管再建術の検証
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無 ガイドラインでの引継ぎ名		
書籍情報	研究ナライン		
	Pubmed ID	12437830	
	医中誌 ID		
	著者名	J Laryngol Otol	
	巻	116	
	ページ	326-330	
	ISSNナンバー	0022-1718	
著者情報	著者	氏名	所属機関
	筆頭著者	Ullah R	Department of Otorhinolaryngology-HNS, Royal Victoria Hospital, Belfast, UK
	その他著者1	Baile N	
	その他著者2	Kinsella J	
	その他著者3	Ankin V	
	その他著者4	Primrose WJ	
	その他著者5	Brooker DS	
レビュワー研究の6項目	目的	嚥下後部・頸部食道における扁平上皮癌に対する咽頭嚥頭食道腫瘍および胃管再建術の有用性の検証	
	データソース	1988年から1997年までに咽頭嚥頭食道腫瘍および胃管再建術を行った26例の症例対照研究	
	研究の選択	1)咽頭嚥頭・頸部食道における局所進行扁平上皮癌であること 2)手術年齢は63.5歳(39-79歳)、男性11例、女性15例、T3が18例、T4が9例、N0が18例、N1が7例、N2が1例であった。 3)15例は喫煙者、5例はアルコール常習者であった。 4)全例が有症状で11例が体重減少をみとめた。 5)多発癌が3例にみられ、4例は術前放射線治療を受けていた。	
	データ抽出	1)年齢、性別、 2)術前治療の有無、 3)手術時間、出血量、入院期間、 4)手術後合併症、 5)手術後の発声状況、 6)リンパ節転移の有無、	
	主な結果	1)手術年齢は63.5歳(39-79歳)、男性11例、女性15例、T3が18例、T4が9例、N0が18例、N1が7例、N2が1例であった。 2)手術の平均時間は5時間(3.5-7.5)で平均出血量は840ml(160-1800)で、ICU平均在院期間は4.2日、入院期間は平均34日(9-84)であった。 3)輸血は平均2.8単位、空腸経管栄養は15日、経鼻胃管チューブは14日であった。 4)ガストログラフィン検査は術後7-10日後に24例行なった。 5)術後死亡は3例で、肺炎、心不全、肺塞栓症であった。術後合併症は24例に認め、血気胸10例、甲状線機能低下症が6例であった。 6)吻合部瘻管5例、吻合部瘻管4例、気管孔瘻管2例にみられた。 7)13例(50%)の患者は再発を認め、頸部リンパ節再発を認めた6例は手術を行ない、3例は非手術であった。 8)3例は現在生存中で、5例は再発なく他病死であった。 9)3例は現性生存中で、5例は再発なく他病死であった。	
	結論	嚥下後部・頸部食道における扁平上皮癌に対する咽頭嚥頭食道腫瘍および胃管再建術は終日摂取を維持させるためには安全で信頼性の高い方法である。	
	備考		
レビュワーコメント	EBMレビュワー氏名	加藤広行	
	EBMレビュワーコメント	嚥下後部・頸部食道における扁平上皮癌に対する咽頭嚥頭食道腫瘍および胃管再建術の有用性を検証した論文である。26例の手術前後の詳細な診断により、咽頭嚥頭食道腫瘍後の再建には胃管再建が安全で信頼性が高いことを示	
クリニカルクエスト、この論文での回答、Mindキーワード	疾患レビュワー氏名		
	クリニカルクエスト1 この論文での回答1	キーワード	読み(全角カナorアルファベット)
	Mindキーワード1	下咽頭癌	カイトウガン
	Mindキーワード2	咽頭嚥頭癌	ケイブツョウガン
	Mindキーワード3	胃管再建	イカンサイケン
	Mindキーワード4	咽頭嚥頭食道腫瘍	イントウコウトウシヨウドウチケンシュツ
	Mindキーワード5	発声	ハッセイ

EBMレビュウ		EBMレビュウ	
基本情報	対象疾患 タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル 論文の日本語タイトル	Results of gastric pump-up reconstruction for benign esophago-gastrostomy in advanced head and neck cancer and general lymphatic metastasis 食道癌および頸部腫瘍に対する胃管挿入による食道癌再建術の検討	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無 ドライトラインでの目次名		
著者情報	研究デザイン	非ランダム化比較試験	
	Pubmed ID	15584157	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Asian J Surg	
	雑誌 ID		
	巻	44:27	
	号	3	
レビュー研究の6項目	ISSNナンバー	180-185	
	雑誌分野		
	原論文		
	発行年月	2004	
	著者	氏名	所属機関
	著者1	Pattavekul P	Department of Surgery, Faculty of Medicine, Prince of Songkla University, Hat Yai, Songkhla, Thailand
	著者2	Pornpatanarak C	
著者3	Ranathong B		
著者4	Boonpatananoong T		
著者5	Pearavud S		
著者6	Pengsanarak K		
著者7	Lueianant V		
著者8	Sinujcharoenchai W		
目的	下咽頭癌と頸部食道癌に対する咽頭癌再建術の臨床的検討と予後転帰の検証		
データソース	1992年～2001年5月に咽頭癌再建術を施行した下咽頭癌および頸部食道癌48例を対象としたレトロスペクティブスタディー		
研究の選択	1)入院時における臨床状態の記載がある 2)手術時の臨床状態および術後併発症の状態の記載がある 3)術後一定期間の臨床状態の記載がある 4)長期予後について調査済みである		
データ抽出	1)術後の再建術の種類を、術後の嚥下および栄養状態は通常量の摂取が可能で逆流のない esod群、摂取量が減少し逆流のない Var群、頻回に嘔吐逆流を認めた poor群の3群に分けて解析		
主な結果	1)48例中術後3ヶ月以内に術後経過と腫瘍学的結果による生存死亡を認め、2)26例(50%)に術後合併症を発生し、創傷率が4例(8.3%)、気管瘻形成、気管瘻の狭窄、腸吻合部瘻が各々2例(4.2%)、肺水腫、肺炎、胃壊死および胆道閉塞、胃の狭窄が各々1例(2.1%)であった。 3)術後の嚥下および栄養状態は通常量の摂取が可能で逆流のない esod群が術後0～3ヶ月で15/29例、3～6ヶ月で13/29例、6～12ヶ月で10/21例、摂取量が減少し逆流のない Var群が術後0～3ヶ月で23/29例、3～6ヶ月で14/29例、6～12ヶ月で10/21例、頻回に嘔吐逆流を認めた poor群が術後0～3ヶ月で1/29例、3～6ヶ月で2/29例、6～12ヶ月で1/21例であった。 4)栄養状態は術後2ヶ月で減少傾向がありそれ以降増加した。Kaslan-Meier法での生存期間比較は2ヶ月であった。		
結論	下咽頭癌と頸部食道癌に対する咽頭癌再建術の術後再建は治療関連死亡率が低く、術後再建術の種類と栄養状態の改善が期待できる。		
備考			
レビューコメント	EBMレビュウ氏名	加藤久行	
	EBMレビュウコメント	頸部腫瘍における咽頭癌再建術を施行した下咽頭癌および頸部食道癌48例を対象としたレトロスペクティブスタディーであるが、腫瘍学的結果と栄養状態は豊富である。機能評価は他の再建術との比較は行われていない。栄養評価については体系的な評価で主観的な判断であり	
	疾患レビュウコメント	進行頸部腫瘍および頸部食道癌術後上皮膚癌に対する咽頭癌再建術の術後上再建術の有効性についてレトロスペクティブに検討している。症例数も少なく、観察期間もコンセンサスを待たない術後上再建術について詳細に検討しており併発症の報告としても信頼性が高い。再建術の種類や栄養状態の評価は評価法として客観性が無いが改善傾向にあることは明らかである。臨床データや消化管通経検査等の他のパラメータを用いた客観的な評価が必要である。	
クリニカルエッセイ	クリニカルエッセイ	進行頸部腫瘍および頸部食道癌術後上皮膚癌に対する咽頭癌再建術の術後上再建術の有効性	
	この論文での回答1	下咽頭癌と頸部食道癌に対する咽頭癌再建術の術後再建は治療関連死亡率が低く、術後再建術の種類と栄養状態の改善が期待できる。	
	Mindsキーワード1	キーワード	込み(全角カタカナアルファベット)
	Mindsキーワード2	下咽頭癌	カイトウガン
	Mindsキーワード3	頸部食道癌	ケイブシヨウカウガン
	Mindsキーワード4	再建術	シヨウブツリョウ
	Mindsキーワード5	胃	サイケンゾウキ
	Mindsキーワード6	逆流食飲	イ
	Mindsキーワード7	栄養状態	キョウリウシヨウカウゾウク
Mindsキーワード8	QOL	エイヨウゾウキ	

EBMレビュウ		EBMレビュウ		
基本情報	対象疾患 タイプ			
タイトル情報	論文の英語タイトル 論文の日本語タイトル	The submucosal extension of esophageal carcinoma for determining...		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無 ドライトラインでの目次名	有り		
著者情報	研究デザイン	コホート研究		
	Pubmed ID	11821782		
	医中誌 ID			
	雑誌名	Surgery		
	雑誌 ID	41:7347		
	巻	131		
	号	15001		
レビュー研究の6項目	ISSNナンバー	S14-S21		
	雑誌分野	0039-6060		
	原論文			
	発行年月	Jan 2002		
	著者	氏名	所属機関	
	著者1	Kuwano H	Department of Surgery I, Faculty	
	著者2	Masuda H		
著者3	Kato H			
著者4	Surimachi K			
目的	食道癌術後下咽癌を伴った食道癌手術(EMR含む)の安全マージンを1983年から2000年までの単一施設での48症例67病変の切除標本の癌の広がりを病理学的に検査する。			
データソース				
研究の選択				
データ抽出	67病変のうち、17病変(25.4%)が粘膜下浸潤を認めた。粘膜下浸潤は、m1症で3.7%、sm1症で37.0%、mp症で46.2%にみられた。sm2までの病変は粘膜下浸潤の範囲は5mm以内に限定されていた。T2症例では30mmを超えて浸潤する症例も認められた。粘膜下浸潤、リンパ管浸潤、血管浸潤、空腸転移の4つの因子のうち3つ以上陽性の症例は予後が5年生存率が22.5%と低く不良であった。			
主な結果	粘膜下浸潤が認められないm1症の場合、粘膜下浸潤は切除の際ほとんど考慮する必要はない。一方、T2症例では30mmを超えて浸潤する症例も認められた。食道癌の手術において切除標本を決定する上には粘膜下の病変のみならず粘膜下病変の評価を正確に行い切除標本を決定する必要がある。			
結論	粘膜下浸潤は、予後不良因子の1つである。			
備考				
レビューコメント	EBMレビュウ氏名	松原久裕		
	EBMレビュウコメント	食道癌における食道切除標本を決定する際に重要な粘膜下浸潤に関する単一施設でのコホート研究。浸潤度別に粘膜下浸潤の程度を詳細に検討している。		
	疾患レビュウコメント	食道癌手術における食道切除標本を決定する上には重要な検討であり、浸潤度がsm2まではT2と同様の粘膜下浸潤を認めるようになり、切除の際に粘膜下の病変のみならず粘膜下病変の評価を正確に行い切除標本を決定する必要がある。		
クリニカルエッセイ	クリニカルエッセイ	sm1以上の癌では粘膜下の病変により食道癌の切除標本を決定する必要がある。No sm3の癌においてはT2の癌と同様の粘膜下浸潤を認める上には粘膜下病変の評価を行い切除標本を決定する。		
	この論文での回答1			
	Mindsキーワード1	キーワード	込み(全角カタカナアルファベット)	
	Mindsキーワード2	粘膜下浸潤	ノンマクランデン	
	Mindsキーワード3	浸潤切除	シヨウブツリョウ	
	クリニカルエッセイ	この論文での回答2	sm1とT2症では粘膜下浸潤の程度が異なる。No sm3の癌においてはT2の癌と同様の粘膜下浸潤を認める上には粘膜下病変の評価を行い切除標本を決定する。	
		Mindsキーワード1	粘膜下浸潤	ノンマクランデン
		Mindsキーワード2	sm3症	エスエム3ガン
	Mindsキーワード3			

基本情報	対象疾患 タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル 論文の日本語タイトル	Randomized study of the benefits of preoperative corticosteroid adm 食道癌手術時の術後合併症発症およびサイトカインの詳細による、	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無 ガイドラインでの目次名		
書誌情報	研究デザイン	ランダム化比較試験	
	Pubmed ID	12170022	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Ann Surg	
	巻	236	
	号	2	
	ページ	184-190	
	ISSNナンバー	0003-4932	
	雑誌分野	医学	
	原本文誌 発行年月	英語 Apr 2002	
著者情報	氏名	所属機関	
	筆頭著者	Sato N	Department of Surgery I, Iwate U
	その他著者1	Koeda K	
	その他著者2	Keda K	
	その他著者3	Kimura Y	
	その他著者4	Aoki K	
	その他著者5	Swaya T	
	その他著者6	Akiyama Y	
	その他著者7	Ishida K	
	その他著者8	Saito K	
	その他著者9	Endo S	
レビュー研究の6項目	目的	食道癌手術時における術前のステロイド投与が術後合併症予防に果たす効果の検証	
	データソース	1)1996/06-2001-01までの 岩手医科大学第一外科での3領域頸清併施食道癌手術施行66例	
	研究の選択	患者背景により適格症例を対象	
	データ抽出	66例を3例ずつの2群に分け、ランダム化比較試験を施行	
	主な結果	1)ステロイド使用群は手術開始30分前に10mg/kgの量でコルコステロイドを使用した。 2)ステロイド使用群では1臓器以上の臓器不全発症率は33% コントロール群(ステロイド非使用群)では1臓器以上の臓器不全発症率は61% 3)ステロイド群で術後人工呼吸器を要した期間が有意に短かった。 4)手術合併症および長期予後は両群に明らかな差はなかった 5) 血中のinterleukin(IL)-1receptor antagonist, IL-6およびIL-8値はステロイド投与で有意に少なかった。IL-10はステロイド投与で増加していた。	
	結論	1)術前にステロイドを使用することにより過剰な炎症性サイトカインの放出が抑制され、呼吸器を始めとする臓器不全を抑制することが出来た。 2)術前のステロイドを使用が長期予後や術後合併症を悪化させることはなかった。 3)食道癌手術時の術前ステロイド投与は合併症(臓器不全)発症の抑制に有用である。	
備考			
EBMLレビューワー氏名	松原久裕		
	単一施設の単一疾患に対する単一の検討項目についてランダム化した試験結果。症例の選択条件が狭く規定されており、適格条件以外の患者背景がよく限られている。長期予後の観察期間が最長4年でありやや短い。しかし本研究のprimary endpointは術後7日以内の合併症(臓器不全)発症頻度の検討であり、長期予後の検討につ		
レビューワーコメント	疾患レビューワー氏名 松原久裕		

疾患レビューワーコメント	食道癌手術における手術侵襲は大きなものであり、従来より術前期の合併症管理が重要な課題であった。近年、過剰な炎症反応が術後合併症(多臓器不全)を誘発しているため、ステロイド投与によって炎症性サイトカインの過剰放出を抑制することにより術後合併症を抑制できると考えられるようになり、ランダム化試験によりその事実を
クリニカルエッセイ この論文での回答、Mindsキーワード	クリニカルエッセイ この論文での回答1 Yes. 臓器不全は減少し、術後の人工呼吸器を必要とする期間も短縮 キーワード 読み(全角カナorアルファベット) Mindsキーワード1 ステロイド投与 ステロイド投与 Mindsキーワード2 術後合併症 ニュージュツキガッペイショウ Mindsキーワード3 臓器不全 ゾウキフゼン Mindsキーワード4
クリニカルエッセイ この論文での回答、Mindsキーワード	クリニカルエッセイ この論文での回答2 Yes. IL-6, IL-8, IL1raを抑制し、過剰な炎症反応を抑える。 キーワード 読み(全角カナorアルファベット) Mindsキーワード1 ステロイド投与 ステロイド投与 Mindsキーワード2 炎症性サイトカイン エンショウセイサイトカイン Mindsキーワード3
クリニカルエッセイ この論文での回答、Mindsキーワード	クリニカルエッセイ この論文での回答3 食道癌手術前のステロイド投与が長期予後や術後合併症の発症に No. 長期予後、術後合併症の発症頻度 キーワード 読み(全角カナorアルファベット) Mindsキーワード1 ステロイド投与 ステロイド投与 Mindsキーワード2 予後 ヨゴ Mindsキーワード3 術後合併症 ジュツキガッペイショウ Mindsキーワード4

基本情報	対象疾患 タイプ	食道癌(専門医向け)	
タイトル情報	論文の英語タイトル 論文の日本語タイトル	Outcomes of extended lymph node dissection for squamous 食道癌	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無 ガイドラインでの目次名		
書誌情報	研究デザイン	コホート研究	
	Pubmed ID	11888470	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Ann Thorac Cardiovasc Surg	
	巻	7	
	ページ	325-329	
	ISSNナンバー	1341-1098	
	雑誌分野	医学	
	原本文誌 発行年月	英語 May 2001	
	著者情報	氏名	所属機関
筆頭著者		Tsurumaru M	First Department of Surgery, Jy
その他著者1		Kajiyama Y	
その他著者2		Udagawa H	
その他著者3 その他著者4		Akiyama H	
レビュー研究の6項目	目的	胸郭食道癌の外科的切除における広範囲頸清の予後の対する有効性を検証する	
	データソース	虎の門病院内で1972年から1995年までの食道癌症例1821例の門病院内で受診し1972年から1995年までの間に食道癌と診断された1821例を対象	
	研究の選択	虎の門病院内で受診し1972年から1995年までの間に食道癌と診断された1821例を対象	
	データ抽出	1821例中1510例が胸郭食道癌の扁平上皮癌であり、そのうち1088例に外科的切除を行った。443例に拡大頸清(1984年以降、3領域頸清と併せて頸清)を行い84例に遠隔(頰後)頸清を行った(1983年以前の症例)。またsmの22例に食道癌切除を行った。胸郭上部食道癌で頸部リンパ節転移が46.0%、胸郭リンパ節転移が52.4%、腹部リンパ節転移が41.3%、胸郭中食道癌で頸部リンパ節転移が50.8%、胸郭リンパ節転移が34.2%、腹部リンパ節転移が35.7%、胸郭下部食道癌で頸部リンパ節転移が27.2%、胸郭リンパ節転移が34.2%、腹部リンパ節転移が67.2%であった。全症例での頸部リンパ節転移率は32.1%であった。smの197例で、系統学的頸清(5生年70.0%)は食道癌発症(6生年38.1%)より予後良好であり、多変量解析ではリンパ節頸清の有無のみが有意な予後決定因子であった。開胸の外科的食道切除では、拡大頸清(443例、5生年50.5%)は標準頸清(2領域頸清)6生年、胸郭食道癌では、3領域のリンパ節頸清に比べて標準のリンパ節頸清を認める。sm胸郭食道癌では、リンパ節頸清施行例がリンパ節頸清をしない食道癌患者より予後良好であった。また、リンパ節頸清の有無が唯一の予後決定因子であった。また、胸郭食道癌扁平上皮癌では3領域頸清が、長期	
	結論	単一施設で、胸郭食道癌を非頸清、2領域頸清と3領域頸清の3群に分けて症例を揃えて非頸清と2領域頸清との2群比較および2領域頸清と3領域頸清の2群比較で検討した。症例数も充分であり、問題点が明確であるが、年代により群別がなされておらず、ランダム化試験ではない。	
	備考		
EBMLレビューワー氏名	松原久裕		
	単一施設で、胸郭食道癌を非頸清、2領域頸清と3領域頸清の3群に分けて症例を揃えて非頸清と2領域頸清との2群比較および2領域頸清と3領域頸清の2群比較で検討した。症例数も充分であり、問題点が明確であるが、年代により群別がなされておらず、ランダム化試験ではない。		
レビューワーコメント	疾患レビューワー氏名 松原久裕	年代により群別を行い、非頸清、2領域頸清と3領域頸清の検討を行った研究で、3領域にいずれにもリンパ節転移を起こすことが明らかとされた。また、2領域頸清よりも3領域頸清のほうが予後を改善することが示された。しかし、食道癌の術前診断の精度の上は目まぐるしく、また、補助療法も改善されているため、3領域頸清の有効性を裏に提唱する	
クリニカルエッセイ この論文での回答、Mindsキーワード	クリニカルエッセイ この論文での回答1 No. 頸部・胸部・腹部の3領域に広範囲に転移を認める。 キーワード 読み(全角カナorアルファベット) Mindsキーワード1 リンパ節頸清 リンパ節頸清 Mindsキーワード2 リンパ節頸清 リンパ節頸清 Mindsキーワード3	胸郭食道癌のリンパ節転移は胸内リンパ節に局限するが No. 頸部・胸部・腹部の3領域に広範囲に転移を認める。 キーワード 読み(全角カナorアルファベット) Mindsキーワード1 リンパ節頸清 リンパ節頸清 Mindsキーワード2 リンパ節頸清 リンパ節頸清 Mindsキーワード3	
	クリニカルエッセイ この論文での回答、Mindsキーワード	クリニカルエッセイ この論文での回答2 sm食道癌でリンパ節頸清は必要か キーワード 読み(全角カナorアルファベット) Mindsキーワード1 sm食道癌 食道癌 Mindsキーワード2 リンパ節頸清 リンパ節頸清 Mindsキーワード3	
	クリニカルエッセイ この論文での回答、Mindsキーワード	クリニカルエッセイ この論文での回答3 胸郭食道癌において3領域頸清は2領域頸清に比し、予後を Yes. 3領域頸清の5生年は50.5%で2領域頸清の5生年37.0% キーワード 読み(全角カナorアルファベット) Mindsキーワード1 3領域頸清 サンノウキカクセイ Mindsキーワード2 2領域頸清 ニノウキカクセイ Mindsキーワード3	

レビュー対象用フォーム		ジャーナル情報	
基本情報	対象疾患 タイプ	臨床専門情報(専門医向け)	
タイトル情報	論文の英語タイトル 論文の日本語タイトル	Strategy of lymph nodes dissection for the lower thoracic esophageal cancer: a nationwide study on 1273 cases of the lymphatic lymph node transfer	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無 ガイドラインでの目次有無		
書誌情報	研究デザイン	症例対照研究	
	PubMed ID	9370164	
	医中誌 ID	1998052946	
	雑誌名	Nippon Geka Gakkai Zasshi	
	雑誌 ID	98	
	巻号	751-754	
ページ	0301-4894		
ISSNナンバー	医学		
雑誌分野	日本語		
原本文種	Sect 1997		
発行年月	氏名		所属機関
著者情報	筆頭著者 その他の著者1 その他の著者2 その他の著者3	Hosokawa M Department of Surgery, Keijukai Sa	
レビュー研究の6項目	目的	術前診断において上縦隔リンパ節転移が性と診断された胸部下部食道癌の至適リンパ節清範囲を決定すること 患佐佐木礼徳病院外科での1989年から1996年までの胸部食道癌手術62例全例を対象	
	データソース	患佐佐木礼徳病院外科(自験例)での1989年から1996年までの胸部食道癌手術62例全例を対象	
	研究の選択	患佐佐木礼徳病院外科(自験例)での1989年から1996年までの胸部食道癌手術62例全例を対象にした、原発部位、遠達度、術前リンパ節転移診断により分類した、部位別のリンパ節転移の病理診断における検索結果と術前リンパ節転移診断の信頼性、再発形式、手術術式の必要性の検討、3領域清を行った27例中胸部下部食道癌は44例であり、その中で12例(31.8%)に頸部リンパ節転移を認め、いずれも上縦隔リンパ節など、他の領域にも明らかなリンパ節転移があった。また、上縦隔リンパ節転移に対する術前診断の信頼性は、EUS(超音波内視鏡)で感度65%特異度89%、CTで感度74%特異度85%、両検査の組み合わせで感度87%であった。癌死例37例中頸部の再発が見られたのは頸部清を行わなかった27例中の1例胸部下部食道癌では12例(32%)以上はリンパ節転移を認めるが、その大部分は局所再発より頸部リンパ節転移である。頸部リンパ節への単独転移が見られることも多く、術前診断にてリンパ節転移が無い症例には頸部清は不要であり2領域清で充分である。	
	データ抽出	患佐佐木礼徳病院外科(自験例)での1989年から1996年までの胸部食道癌手術62例全例を対象	
	主な結果	患佐佐木礼徳病院外科(自験例)での1989年から1996年までの胸部食道癌手術62例全例を対象にした、原発部位、遠達度、術前リンパ節転移診断により分類した、部位別のリンパ節転移の病理診断における検索結果と術前リンパ節転移診断の信頼性、再発形式、手術術式の必要性の検討、3領域清を行った27例中胸部下部食道癌は44例であり、その中で12例(31.8%)に頸部リンパ節転移を認め、いずれも上縦隔リンパ節など、他の領域にも明らかなリンパ節転移があった。また、上縦隔リンパ節転移に対する術前診断の信頼性は、EUS(超音波内視鏡)で感度65%特異度89%、CTで感度74%特異度85%、両検査の組み合わせで感度87%であった。癌死例37例中頸部の再発が見られたのは頸部清を行わなかった27例中の1例胸部下部食道癌では12例(32%)以上はリンパ節転移を認めるが、その大部分は局所再発より頸部リンパ節転移である。頸部リンパ節への単独転移が見られることも多く、術前診断にてリンパ節転移が無い症例には頸部清は不要であり2領域清で充分である。	
	結論	患佐佐木礼徳病院外科(自験例)での1989年から1996年までの胸部食道癌手術62例全例を対象にした、原発部位、遠達度、術前リンパ節転移診断により分類した、部位別のリンパ節転移の病理診断における検索結果と術前リンパ節転移診断の信頼性、再発形式、手術術式の必要性の検討、3領域清を行った27例中胸部下部食道癌は44例であり、その中で12例(31.8%)に頸部リンパ節転移を認め、いずれも上縦隔リンパ節など、他の領域にも明らかなリンパ節転移があった。また、上縦隔リンパ節転移に対する術前診断の信頼性は、EUS(超音波内視鏡)で感度65%特異度89%、CTで感度74%特異度85%、両検査の組み合わせで感度87%であった。癌死例37例中頸部の再発が見られたのは頸部清を行わなかった27例中の1例胸部下部食道癌では12例(32%)以上はリンパ節転移を認めるが、その大部分は局所再発より頸部リンパ節転移である。頸部リンパ節への単独転移が見られることも多く、術前診断にてリンパ節転移が無い症例には頸部清は不要であり2領域清で充分である。	
備考			
EBMレビューワー氏名	松原久裕		
EBMレビューワーコメント	1. 術前リンパ節転移診断の信頼性 2. 病理組織学的検索による胸部下部食道癌の頸部リンパ節転移の頻度 3. 胸部下部食道癌に対する頸部清の有無が再発-予後に及ぼす影響 の3点の検討をしている。症例選択の基準(頸部清を行うか否か)が明確でない後向き		
レビューワーコメント	疾患レビューワー氏名	松原久裕	
	疾患レビューワーコメント	食道癌における頸部リンパ節への転移は多く、徹底した頸部清が必要であると考えらるが、手術侵襲に伴う術後合併症の頻度も高い。胸部下部食道癌において、頸部清が必要か否かは重要な臨床的・病理学的課題である。転移の頻度、再発のリスク、術前診断において頸部清を省略できる指標の確立、頸部清省略による予後への影響をランダム化比較試験において検証が必要である	
クリニカルクエスト	クリニカルクエスト	胸部下部食道癌で術前診断でのリンパ節転移は症例に対し頸部清は必要か?	
クリニカルクエスト	この論文での回答1	No. 術前診断にて他部位を含めて術前リンパ節転移を疑わない胸部下部食道癌症例では頸部リンパ節への単独転移はなく、頸部清はキーワード 読み(全角カナ/アルファベット)	
この論文での回答、Mindsキーワード	Mindsキーワード1	胸部下部食道癌 キョウブアブショクドウガン	
	Mindsキーワード2	頸部リンパ節転移 ケイリンパノセツカクセイ	
	Mindsキーワード3		
クリニカルクエスト	クリニカルクエスト	胸部食道癌で上縦隔リンパ節転移における術前診断は正確か?	
クリニカルクエスト	この論文での回答2	Yes EUSとCTを組み合わせたことにより信頼性は87%である	
この論文での回答、Mindsキーワード	キーワード	読み(全角カナ/アルファベット)	
	Mindsキーワード1	上縦隔リンパ節転移 ジョウジュウカクノバツテンイ	
	Mindsキーワード2	術前診断 ジュツゼンジンダン	
	Mindsキーワード3		

レビュー対象用フォーム		ジャーナル情報	
基本情報	対象疾患 タイプ	臨床専門情報(専門医向け)	
タイトル情報	論文の英語タイトル 論文の日本語タイトル	Results of a nationwide study on 1 to three-field lymph node	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無 ガイドラインでの目次有無		
書誌情報	研究デザイン	症例対照研究	
	PubMed ID	1745490	
	医中誌 ID	48	
	雑誌名	Oncology	
	雑誌 ID	48	
	巻号	411-420	
ページ	0030-2414		
ISSNナンバー	医学		
雑誌分野	英語		
原本文種	Sect 1991		
発行年月	氏名		所属機関
著者情報	筆頭著者 その他の著者1 その他の著者2 その他の著者3 その他の著者4	Jesono K Department of Surgery, Chiba U	
レビュー研究の6項目	目的	胸部食道癌の外科的切除に対する3領域清の有効性を示す 日本国内において、食道癌研究会所属機関中の36機関からの1983年から1989年までのアンケート調査 各施設での食道癌手術全例に対するアンケートによる 各施設での食道癌手術全例に対するアンケートによる	
	データソース	各施設での食道癌手術全例に対するアンケートによる	
	研究の選択	各施設での食道癌手術全例に対するアンケートによる	
	データ抽出	各施設での食道癌手術全例に対するアンケートによる	
	主な結果	全490例をアンケートによって収集、解析し、2領域清と3領域清の群に分け比較された。2領域清を行ったが、3領域清を行うか否かの選択は施設毎の方針によった。35施設では3領域清を、61施設では2領域清を行った。また、3領域清を行った35施設においても一律では全例に3領域清を行ったが一部の施設では症例によって術後遠隔転移した。3領域清で手術死亡率2.8%(4.6%×カッパ2領域清、4.6%×有意差あり、以下同)、術後の術後合併症は46.1%(44.0%)、3領域清群における頸部リンパ節転移率は27.4%、5年生存率34.3%(26.7%)、腫瘍占拠部位別に予後を比べた場合には頸部食道癌では有意差をもって3領域清の方が予後が良く、腹部食道癌に限ると3領域清と2領域清は有意差はなかった。予後を改善させることには頸部清の有無に比べて外科的切除の有無は、頸部リンパ節転移する(3領域清)か否か(2領域清)に関し、今回の集計により3領域清は明らかな手術死亡率や術後合併症を悪化させることなく予後を改善させることが明らかとなった。食道癌の予後は手術後遠隔転移は頸部清を、術後合併症の再発も十分に成績ではないが、3領域清に補助療法を組み合わせたことにより決定的な結果が出る可能性がある。	
	結論	食道癌は広範囲にリンパ節転移を呈するため、頸部リンパ節清を含めた3領域におよぶリンパ節清が必要と思われる。一方、3領域清による手術侵襲の増加や、手術死亡率や合併症発生率の増加が懸念される。本研究では3領域清が手術死亡率、術後合併症を増加させないことを示した。頸部リンパ節転移を27%の症例に認める中でランダム化比較試験として頸部清を行わずに臨床研究の設定は困難であり、今後多数の施設で3領域清が手術死亡率、術後合併症の再発を改善させることにより決定的な結果が出る可能性がある。	
備考			
EBMレビューワー氏名	松原久裕		
EBMレビューワーコメント	多数施設から多数の症例(490例)を集計した解析結果として、症例数は充分である。清範囲によって調査点は十分に取られており好成績もクリアである。比較対象の群の採り分けが施設毎あるいは施設の判断によるため、施設毎の手術精度の差によるバイアスの可能性の否定は出せない、大規模なランダム化比較試験による解析が必要である。		
レビューワーコメント	疾患レビューワー氏名	松原久裕	
	疾患レビューワーコメント	食道癌は広範囲にリンパ節転移を呈するため、頸部リンパ節清を含めた3領域におよぶリンパ節清が必要と思われる。一方、3領域清による手術侵襲の増加や、手術死亡率や合併症発生率の増加が懸念される。本研究では3領域清が手術死亡率、術後合併症を増加させないことを示した。頸部リンパ節転移を27%の症例に認める中でランダム化比較試験として頸部清を行わずに臨床研究の設定は困難であり、今後多数の施設で3領域清が手術死亡率、術後合併症の再発を改善させることにより決定的な結果が出る可能性がある。	
クリニカルクエスト	クリニカルクエスト	頸部リンパ節転移は予後不良因子であるか?	
クリニカルクエスト	この論文での回答1	Yes. 頸部清清行例においても頸部リンパ節転移の黒かった1055例の5年生存率は38.8%、転移陽性の589例では20.2%	
この論文での回答、Mindsキーワード	キーワード	読み(全角カナ/アルファベット)	
	Mindsキーワード1	頸部リンパ節転移 ケイリンパノセツカクセイ	
	Mindsキーワード2	予後因子 ヨゴイン	
	Mindsキーワード3		

クリニカルクエスト	この論文での回答2	3領域清は2領域清に比し、手術死亡率(術後合併症) No.3領域清で手術死亡率2.8%(4.6%×カッパ2領域清)、キーワード 読み(全角カナ/アルファベット)	
この論文での回答、Mindsキーワード	Mindsキーワード1	3領域清 サロウイキカクセイ	
	Mindsキーワード2	2領域清 ニロウイキカクセイ	
	Mindsキーワード3	手術死亡率 シュジュツボクシ	
	Mindsキーワード4	術後合併症 ジョウゴカッパイショウ	
	Mindsキーワード5		
クリニカルクエスト	クリニカルクエスト	3領域清は2領域清に比し、予後を改善するか	
クリニカルクエスト	この論文での回答3	Yes. 3領域清の5年生存率は34.3%、2領域清で26.7%有	
この論文での回答、Mindsキーワード	キーワード	読み(全角カナ/アルファベット)	
	Mindsキーワード1	3領域清 サロウイキカクセイ	
	Mindsキーワード2	2領域清 ニロウイキカクセイ	
	Mindsキーワード3	予後 ヨゴ	
	Mindsキーワード4		

レビュワーコメント		論文の引用情報	
基本情報	対象疾患 タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル 論文の日本語タイトル 論文の目的	Three-field lymphadenectomy for carcinoma of the esophagus and gastroesophageal junction in T4 R0 resections: Impact on staging, disease-free survival and outcome 食道がん切除後のリンパ節転移の意義について 食道がん切除後のリンパ節転移の意義について	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用 イデオロギでの目次		
著者情報	研究デザイン PubMed ID 著者名 雑誌名 雑誌 ID 巻 号 ページ ISSNナンバー 雑誌分類 原本文種 発行年月	ランダム化比較試験 19344012 Am J Gastroenterol 421030 94 1490-1496 0002-9270 医学 英語 Jan 1999	
著者情報	筆頭著者 その他著者1 その他著者2 その他著者3 その他著者4 その他著者5 その他著者6 その他著者7 その他著者8 その他著者9 その他著者10	T.Lerut P.Naefoux J.Moens M.Sch W.Crosemans G.Decker P.De Leyn Van Raemdonck N.Ectors	所属機関 Departments of Thoracic Surgery, University Hospital Gasthuisberg, University of Leuven, Belgium
レビュワー研究の6項目	目的 データソース 研究の選択 データ抽出 主な結果 結論 備考	食道癌、食道胃接合部癌に対する3領域リンパ節転移の意義について 1991年から1999年までに3領域転移を施行された食道癌切除例192例のうち、R0であった174例について検討 ステージング、生存率、再発 ①在院死亡率: 1%、平均集中治療室滞在期間: 1.8日。合併症は肺合併症が多く、32.8%にみられた。術後在院日数は平均19.9日(中央値14日) ②3領域転移を行うことで、15%に病期分類の変更があり、12%はステージIVとなった。 ③3領域転移全症例の5年生存率は41.9%(1年、3年は78.4%、51%)であった。 ④頸部リンパ節転移性症例の5年生存率は12.8%、陰性症例では31.1%であり、陽性症例についてみると扁平上皮癌のほうが陰性よりも予後良好であった(生存率: 33.0% vs 15.6%, p=0.001)。 ⑤3領域転移は合併症、死亡率の上昇には伴わずに施行する。 ⑥術前予測されていなかった頸部リンパ節転移のためにステージが上方修正され、12%の症例がステージIになることから、現状の臨床的成績は十分である。 ⑦R0症例については3領域転移は生存率の改善に寄与する。 ⑧胸郭中食道癌における頸部リンパ節はUICC-TNM分類でM1bであるが、今後の検討から考えると、N1と考えるべきであり、3領域転移による改善がある。	

レビュワーコメント	EBMレビュワーコメント EBMレビュワーコメント 疾患レビュワーコメント	単一施設におけるコホート研究。多数の症例を詳細に検討した。疫学データは少ない。3領域転移に関する検討。多施設の前向き研究の必要である。
クリニカルエッセイ この論文での回答、Mindsキーワード	クリニカルエッセイ この論文での回答1 Mindsキーワード1 Mindsキーワード2 Mindsキーワード3	食道癌手術に3領域転移は必要か? Yes. 正確に病期診断を行うためには必要であり、胸郭中食道癌に3領域転移は安全に施行可能であり、少なくとも胸郭中食道癌に3領域転移は安全に施行可能であり、少なくとも胸郭中食道癌に3領域転移は安全に施行可能である。再発率の低下に寄与すると考えられる。正確な病期診断に極めて重要である。
クリニカルエッセイ この論文での回答、Mindsキーワード	クリニカルエッセイ この論文での回答2 Mindsキーワード1 Mindsキーワード2 Mindsキーワード3 Mindsキーワード4	胸郭中食道癌における頸部リンパ節転移はM1bでなくM1cに分類され、3領域転移により正確な病期分類、転移効果も期待され得る。再発率の低下に寄与すると考えられる。正確な病期診断に極めて重要である。

レビュワーコメント		論文の引用情報	
基本情報	対象疾患 タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル 論文の日本語タイトル	How important is the route of reconstruction after esophagectomy? A randomized trial comparing the third-tracheostomy tube with the third-tracheostomy tube	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用 イデオロギでの目次	有り	
著者情報	研究デザイン PubMed ID 著者名 雑誌名 雑誌 ID 巻 号 ページ ISSNナンバー 雑誌分類 原本文種 発行年月	ランダム化比較試験 19344012 Am J Gastroenterol 421030 94 1490-1496 0002-9270 医学 英語 Jan 1999	
著者情報	筆頭著者 その他著者1 その他著者2 その他著者3 その他著者4 その他著者5 その他著者6 その他著者7 その他著者8 その他著者9 その他著者10	Gawad KA Jesch SB Bumann D Lubbeck M Menneke LC Gloeckle C Kneefel WT Busch C Kochler T Stibicki R	所属機関 Department of Surgery, Universit
レビュワー研究の6項目	目的 データソース 研究の選択 データ抽出 主な結果 結論 備考	胸管および後縦隔管再建の術後死亡率とQOLをランダム化比較試験 1993年から1995年までの26例の食道癌手術症例 胸管再建は合併症および死亡率の上昇を伴った。後縦隔管再建は、middle third tubeの比較に比べて、胸管再建における合併症RO症例においては後縦隔管再建が推奨される。不完全な切除R1 or R2症例においては後縦隔管再建による合併症を避けるため胸管再建が望ましいと考えられる。 不完全な切除R1 or R2症例においては後縦隔管再建による合併症を避けるため胸管再建が望ましいと結論しているが、明確な科学的データは示されていない。	
レビュワーコメント	EBMレビュワーコメント EBMレビュワーコメント 疾患レビュワーコメント	食道癌切除後の再建経路に関する単一施設による前向きランダム化比較試験。サンプルサイズが小さく、しかも合併症等の検討において重要な開胸の有無に関して胸管再建と後縦隔管の群間に有意差がある。再建の安全性については多施設ランダム化比較試験が待たれる。	
クリニカルエッセイ この論文での回答、Mindsキーワード	クリニカルエッセイ この論文での回答1 Mindsキーワード1 Mindsキーワード2 Mindsキーワード3	胸管再建は合併症、死亡率を増加させず、食物摂取開始の検討から後縦隔管再建が推奨される。	
クリニカルエッセイ この論文での回答、Mindsキーワード	クリニカルエッセイ この論文での回答2 Mindsキーワード1 Mindsキーワード2 Mindsキーワード3	後縦隔管再建が胸管再建より自覚症状において優れる。	

リンパ節研究用データベース		データベース名
基本情報	対象疾患 タイプ	Three-field lymphadenectomy and pattern of lymph node spread in T3
タイトル情報	論文の英語タイトル 論文の日本語タイトル	Three-field lymph node dissection for squamous cell and adenocarcinoma
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無 ガイドラインでの引用有無 ガイドラインでの目次名	
書誌情報	研究デザイン	その他
	PubMed ID	10431857
	要約 ID	
	雑誌名	Eur J Cardiothorac Surg
	雑誌 ID	15
	巻	6
著者情報	筆頭著者	氏名 Department of Thoracic Surgery Cath-
	その他著者1	De Leyn P
	その他著者2	Coosemans W
	その他著者3	Van Raemdonck D
	その他著者4	Lerut J
	その他著者5	
レビュワーコメント	目的	食道癌および食道胃接合部癌T3症例において3領域郭清がより正確な1994-1996年までのこの施設で手術された食道、及び食道胃接合部癌
	研究の選択	
	データ抽出	
	主な結果	324例中リンパ節転移を認めたT3症例37例(遠位食道癌17例、食道胃接合部癌20例)のリンパ節を検討した。全部で240個のリンパ節を抽出し、食道胃接合部癌では15.0%、遠位食道癌では12.7%に転移を認めた。頸部リンパ節転移はすべての食道胃接合部癌症例で認め、遠位食道癌では70%に認められた。胸部リンパ節転移は食道胃接合部癌で40%に認め、遠位食道癌では70%に認められた。頸部リンパ節転移は食道胃接合部癌で0%、遠位食道癌では5.3%に認められた。食道胃接合部癌の3症例では①3領域郭清は病期分類の正確性を向上させる。②頸部リンパ節転移の頻度は高い。③食道胃接合部癌では特にスキップ転移を認める。④このような予断できない頸部リンパ節転移の存在は術前放射線化学療法において頸部リンパ節を照射範囲に入れる必要性が考慮される。
	結論	
	備考	
レビュワーコメント	EBMレビュワー氏名	松原久裕
	EBMレビュワーコメント	T3下部食道癌、食道胃接合部癌におけるリンパ節転移の様式を3領域郭清症例について検討し、後ろ向き研究であり、サンプルサイズも大きくない。欧米での3領域郭清の少ない報告の1つである。対象領域の食道癌における頸部リンパ節転移の有無に関する重要な検討である。
レビュワーコメント	疾患レビュワー氏名	松原久裕
	疾患レビュワーコメント	T3下部食道癌、食道胃接合部癌におけるリンパ節転移頻度における3領域郭清は正確な病期分類を可能にすることが明らかになった。生体への奇も、奇発への効果についてはサンプルサイズも小さく、検討されていない。今後の大規模な多施設試験が待たれる。
クリニカルエッセイ	クリニカルエッセイ	T3下部食道癌、食道胃接合部癌における頸部リンパ節転移は稀であり、3領域郭清は不変である。No.頸部リンパ節転移はリンパ節転移頻度の35.3%、20.0%に認められる。頸部効果については今後の検討が必要である。
	この論文での回答	Mindsキーワード1 下部食道癌 Mindsキーワード2 食道胃接合部癌 Mindsキーワード3 頸部リンパ節転移 Mindsキーワード4 3領域郭清 Mindsキーワード5
クリニカルエッセイ	クリニカルエッセイ	T3下部食道癌、食道胃接合部癌において頸部リンパ節転移を認めないNo.食道胃接合部癌の症例においてリンパ節転移頻度20例中3例に頸部リンパ節転移を認め、頸部リンパ節転移を認めない症例は1例に認められた。
	この論文での回答	Mindsキーワード1 食道胃接合部癌 Mindsキーワード2 ショクドワイセツコウブガン

リンパ節研究用データベース		データベース名
基本情報	対象疾患 タイプ	Three-field lymph node dissection for squamous cell and adenocarcinoma
タイトル情報	論文の英語タイトル 論文の日本語タイトル	Three-field lymph node dissection for squamous cell and adenocarcinoma
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無 ガイドラインでの引用有無 ガイドラインでの目次名	
書誌情報	研究デザイン	コホート研究
	PubMed ID	12170022
	要約 ID	
	雑誌名	Ann Surg.
	雑誌 ID	236
	巻	2
著者情報	筆頭著者	氏名 所属機関
	その他著者1	Altorki N Division of General Thoracic Surgery, We
	その他著者2	Kent M
	その他著者3	Ferrara C
	その他著者4	Part J
	その他著者5	
レビュワーコメント	目的	食道癌および食道胃接合部癌における頸部リンパ節転移の頻度と、食道胃接合部癌における3領域リンパ節郭清が生存率に与える影響を評価する。
	データソース	1)1984/85-2001/04までの Weill Medical College 胸部外科での3領域郭清併行食道癌手術施行80例(扁平上皮癌32例腺癌48例) 2)1988-1994年の食道癌3領域郭清に関する日本のコホート研究結果の英文雑誌5
	研究の選択	臨床病期として過剰症例を対象。
	データ抽出	文献については統計数値のみを引用
	主な結果	1)3領域郭清食道癌手術施行80例の全例死亡率5%、合併症発生率46%。2)反回神経麻痺から深頸部のリンパ節への転移は36% (腺癌37%扁平上皮癌34%)であった。3)同じく頸部リンパ節への転移頻度は中部食道癌で60%、下部食道癌で32%であった。4)全症例における5年生存率51%、5年無病生存率46%であった。5)リンパ節転移は69%の症例に存在した。6)リンパ節転移を認めない症例の5年生存率は88%、リンパ節転移性症例の5年生存率は33%であった。7)頸部リンパ節転移性症例の5年生存率は扁平上皮癌40%、腺癌59%であった。8)3領域郭清の米国による症例死亡率の増加は認めない。9)3領域郭清による合併症の増加は受容限度内である。10)頸部リンパ節転移性率は36%であった。4300%の症例において3領域郭清により頸部リンパ節転移が臨床病期分類に影響した。5)3領域郭清は食道癌における最も正確な病期分類を提供する。また、3領域郭清に16例に術前化学療法、4例に術後放射線療法を行った。
	結論	
備考		
レビュワーコメント	EBMレビュワー氏名	松原久裕
	EBMレビュワーコメント	単一施設の単一患者に対する単施設研究。資料学的な文献との比較より明確な差が認められていない。検討期間が短いものも含まれており、長期予後の解析は今後の検討が待たれる。
レビュワーコメント	疾患レビュワー氏名	松原久裕
	疾患レビュワーコメント	

疾患レビュワーコメント	食道癌に対する3領域郭清の移行は、日本における報告が主体であり、米国において患者背景等が異なる中で類似の結果が報告されたことは評価に値する。日本ではほとんどが扁平上皮癌であるのに対し、当該研究の対象症例の60%が腺癌である。正確な病期分類に基づき予後を知るためには、3領域郭清が必須であると推察される。	
クリニカルエッセイ	この論文での回答1 この論文での回答2 この論文での回答3 この論文での回答4 この論文での回答5	3領域郭清により院内死亡率が増加するかどうか No.合併症の増加も許容範囲内 読み(全角カナorアルファベット) キーワード1 3領域郭清 キーワード2 サントリーイキカクセイ キーワード3 ザイシンシホウ
クリニカルエッセイ	この論文での回答1 この論文での回答2 この論文での回答3 この論文での回答4 この論文での回答5	頸部リンパ節転移の有無が、臨床病期に影響するか? Yes.20%が臨床病期が上方修正された。 読み(全角カナorアルファベット) キーワード1 頸部リンパ節転移 キーワード2 ケイブリンバセツコウセイ キーワード3 臨床病期 キーワード4 リンショウビョウキ
クリニカルエッセイ	この論文での回答1 この論文での回答2 この論文での回答3 この論文での回答4 この論文での回答5	食道癌手術に3領域郭清は行うべきか? Yes.正確に病期診断を行うためには必須であり、生存率改善への奇とがキーワード 読み(全角カナorアルファベット) キーワード1 3領域郭清 キーワード2 サントリーイキカクセイ キーワード3 ビョウキシンダン

基本情報	対象疾患	胸食道癌に対して経皮的に食道切除術を行う食道癌 (VATS) による食道癌
タイプ	臨床専門情報 (専門医向け)	
タイトル情報	論文の日本語タイトル	胸食道癌手術上皮膚に於ける筋スリッパ (筋層を伴う胸筋群) 下食道切離術 (VATS) における Learning curve とその結果
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用書	ガイドラインでの引用書
書籍情報	著者名	菅野 隆光
	著者名1	M. Takemura
	著者名2	M. Yamashiro
	著者名3	N. Takami
	著者名4	S. Lee
	著者名5	M. Ueno
	著者名6	T. Yasuda
	著者名7	A. Fukuhara
	著者名8	Y. Hamamoto
	著者名9	Y. Fujiwara
著者名10	M. Kinoshita	
編集情報	編集者	H. Doigi
編集者1	M. Takemura	Department of Gastroenterological Surgery, Osaka City University Graduate School of Medicine, Osaka, Japan
編集者2	M. Yamashiro	
編集者3	N. Takami	
編集者4	S. Lee	
編集者5	M. Ueno	
編集者6	T. Yasuda	
編集者7	A. Fukuhara	
編集者8	Y. Hamamoto	
編集者9	Y. Fujiwara	
編集者10	M. Kinoshita	
出版情報	出版年	2003
レビュワー研究の6項目	対象	1995年から2002年の間に、胸部腫瘍科で根治的食道切除術の適応と判断された胸食道癌手術上皮膚癌患者122例のうち、下記適応基準を満たした194例に対してVATS (n=60) とopen (n=134) の比較を行った。研究できた80例を除外した。VATSは2003年5月以降に実施された。VATS患者は1995年から1998年5月までの14例をgroup 1、1998年6月から2002年までの48例をgroup 2とした。2. 腫瘍学的因子 (T, N, M) 分類、および、手術後生存率、出血量、経膈リンパ管腫瘍、合併症発生率について比較を行った。3. 術後呼吸器合併症発生率に関する検討を行った。
	方法	1. 腫瘍科に罹患した、臨床病期が早期、および、術前呼吸器合併症を認めなかった。2. 2年生存率は50%以上であった。3. 腫瘍学的因子 (T, N, M) 分類、および、術後呼吸器合併症発生率について比較を行った (p<0.0001)。4. 術後呼吸器合併症発生率について比較を行った (p=0.0076)。5. 合併症発生率について比較を行った (p=0.012)。6. 術後呼吸器合併症発生率について比較を行った (p=0.045)。7. 術後呼吸器合併症発生率について比較を行った (p=0.047)。8. 多変量解析では、術者の手術経験のみが危険因子 (p=0.032) であり、術後呼吸器合併症発生率 (p=0.011) と手術経験 (p=0.004) が独立した危険因子であった。9. VATSは開胸手術と比較して、T, N, Mに依らずに術後呼吸器合併症発生率であった。術後呼吸器合併症発生率と経膈リンパ管腫瘍に関しては、開胸手術と比較して術後呼吸器合併症発生率と経膈リンパ管腫瘍に、手術経験と関係するまでに34例を除外した。手術経験が増えるとともに、合併症発生率も増加する。手術経験が増えるとともに、合併症発生率も増加する。手術経験が増えるとともに、合併症発生率も増加する。
	主な結果	1. 腫瘍科に罹患した、臨床病期が早期、および、術前呼吸器合併症を認めなかった。2. 2年生存率は50%以上であった。3. 腫瘍学的因子 (T, N, M) 分類、および、術後呼吸器合併症発生率について比較を行った (p<0.0001)。4. 術後呼吸器合併症発生率について比較を行った (p=0.0076)。5. 合併症発生率について比較を行った (p=0.012)。6. 術後呼吸器合併症発生率について比較を行った (p=0.045)。7. 術後呼吸器合併症発生率について比較を行った (p=0.047)。8. 多変量解析では、術者の手術経験のみが危険因子 (p=0.032) であり、術後呼吸器合併症発生率 (p=0.011) と手術経験 (p=0.004) が独立した危険因子であった。9. VATSは開胸手術と比較して、T, N, Mに依らずに術後呼吸器合併症発生率であった。術後呼吸器合併症発生率と経膈リンパ管腫瘍に関しては、開胸手術と比較して術後呼吸器合併症発生率と経膈リンパ管腫瘍に、手術経験と関係するまでに34例を除外した。手術経験が増えるとともに、合併症発生率も増加する。手術経験が増えるとともに、合併症発生率も増加する。
	結論	開胸手術における筋スリッパ筋層を伴う食道切除術の呼吸器合併症発生率は2%と報告されている。本研究においては、VATS経験者が20例を除外した結果、術後呼吸器合併症発生率は30%であった。VATSは開胸手術と比較して、術後呼吸器合併症発生率と経膈リンパ管腫瘍に、手術経験と関係するまでに34例を除外した。手術経験が増えるとともに、合併症発生率も増加する。手術経験が増えるとともに、合併症発生率も増加する。
	備考	VATSの広がり、および、有効性を十分に説明できる十分なデータを得るまで、VATSの手術が安全である。一人の術者によるデータであり、技術習得にまで至っていない。

レビュワーコメント	疾患レビュワー氏名	別冊 隆光
疾患レビュワー氏名	別冊 隆光	
クリニカルエッセイ	この論文での回答1	VATSの手術が安全であるまでに何例の経験が必要か？
この論文での回答1	キーワード	読み(金角カナルファベット)
Mindsキーワード1	食道癌	シロウドウガン
Mindsキーワード2	MIE	MIE
Mindsキーワード3	開胸・開腹	カイキョウ・カイフ
Mindsキーワード4	形質	カクシツ
クリニカルエッセイ	この論文での回答2	1. 腫瘍科に罹患した、臨床病期が早期、および、術前呼吸器合併症を認めなかった。2. 2年生存率は50%以上であった。3. 腫瘍学的因子 (T, N, M) 分類、および、術後呼吸器合併症発生率について比較を行った (p<0.0001)。4. 術後呼吸器合併症発生率について比較を行った (p=0.0076)。5. 合併症発生率について比較を行った (p=0.012)。6. 術後呼吸器合併症発生率について比較を行った (p=0.045)。7. 術後呼吸器合併症発生率について比較を行った (p=0.047)。8. 多変量解析では、術者の手術経験のみが危険因子 (p=0.032) であり、術後呼吸器合併症発生率 (p=0.011) と手術経験 (p=0.004) が独立した危険因子であった。9. VATSは開胸手術と比較して、T, N, Mに依らずに術後呼吸器合併症発生率であった。術後呼吸器合併症発生率と経膈リンパ管腫瘍に関しては、開胸手術と比較して術後呼吸器合併症発生率と経膈リンパ管腫瘍に、手術経験と関係するまでに34例を除外した。手術経験が増えるとともに、合併症発生率も増加する。手術経験が増えるとともに、合併症発生率も増加する。
この論文での回答2	キーワード	読み(金角カナルファベット)
Mindsキーワード1	食道癌	シロウドウガン
Mindsキーワード2	MIE	MIE
Mindsキーワード3	手術経験	シユジュツカクシツ
Mindsキーワード4	合併症	カクシツ
クリニカルエッセイ	この論文での回答3	術者の手術経験
この論文での回答3	キーワード	読み(金角カナルファベット)
Mindsキーワード1	食道癌	シロウドウガン
Mindsキーワード2	手術経験	シユジュツカクシツ
Mindsキーワード3	合併症	カクシツ
Mindsキーワード4	形質	カクシツ

基本情報	対象疾患	食道癌患者に対して、胸腔鏡・腹腔鏡併用食道切除術を施行した症例
タイプ	臨床専門情報 (専門医向け)	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Minimally Invasive Esophagectomy Outcome in 222 Patients
論文の日本語タイトル	経胸鏡食道切除術を施行した222例に関する検討	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用書	ガイドラインでの引用書
書籍情報	著者名	菅野 隆光
	著者名1	James D. Lubicz
	著者名2	Miguel A. Valero-Frivers
	著者名3	Ferdinando G. DiMauro
	著者名4	Neil A. Grisham
	著者名5	James S. McCaughan
	著者名6	Virginia R. Little
	著者名7	Philip S. Schauer
	著者名8	John M. Gleason
	著者名9	Hernan O. Parra
編集情報	編集者	H. Doigi
編集者1	M. Takemura	Department of Thoracic Surgery and Foregut Surgery, University of Pittsburgh Medical Center
編集者2	M. Yamashiro	
編集者3	N. Takami	
編集者4	S. Lee	
編集者5	M. Ueno	
編集者6	T. Yasuda	
編集者7	A. Fukuhara	
編集者8	Y. Hamamoto	
編集者9	Y. Fujiwara	
編集者10	M. Kinoshita	
出版情報	出版年	2003
レビュワー研究の6項目	対象	1995年から2002年5月まで胸腔鏡併用食道切除術 (MIE) を施行した222例。EUSおよびCTにて切除可能と診断し、胃管挿入および腹部検査可能と判断した食道癌患者194例 (MIE) と比較した。
	方法	1. 術前、初め6例は胸腔鏡下経膈筋層食道切除術を、その後の214例は、胸腔鏡併用食道切除術を施行した。再手術は219例 (98%)、術後呼吸器合併症発生率は21%であった。2. 術後呼吸器合併症発生率について比較を行った。3. 術後のQOLについての評価を行った。4. Scoring System (SS) を用いて、術後のQOLを評価した。5. 術後のQOLを評価した。6. 術後のQOLを評価した。7. 術後のQOLを評価した。8. 術後のQOLを評価した。9. 術後のQOLを評価した。10. 術後のQOLを評価した。
	主な結果	1. 術前、初め6例は胸腔鏡下経膈筋層食道切除術を、その後の214例は、胸腔鏡併用食道切除術を施行した。再手術は219例 (98%)、術後呼吸器合併症発生率は21%であった。2. 術後呼吸器合併症発生率について比較を行った。3. 術後のQOLについての評価を行った。4. Scoring System (SS) を用いて、術後のQOLを評価した。5. 術後のQOLを評価した。6. 術後のQOLを評価した。7. 術後のQOLを評価した。8. 術後のQOLを評価した。9. 術後のQOLを評価した。10. 術後のQOLを評価した。
	結論	MIEは従来の開胸・開腹併用食道切除術に比べて、術後呼吸器合併症発生率と経膈リンパ管腫瘍に、手術経験と関係するまでに34例を除外した。手術経験が増えるとともに、合併症発生率も増加する。手術経験が増えるとともに、合併症発生率も増加する。
	備考	VATSの広がり、および、有効性を十分に説明できる十分なデータを得るまで、VATSの手術が安全である。一人の術者によるデータであり、技術習得にまで至っていない。

レビュワーコメント	疾患レビュワー氏名	別冊 隆光
疾患レビュワー氏名	別冊 隆光	
クリニカルエッセイ	この論文での回答1	VATSの手術が安全であるまでに何例の経験が必要か？
この論文での回答1	キーワード	読み(金角カナルファベット)
Mindsキーワード1	食道癌	シロウドウガン
Mindsキーワード2	VATS	トランススウ
Mindsキーワード3	手術経験	トランススウ
クリニカルエッセイ	この論文での回答2	VATSは開胸手術と比較して、術後呼吸器合併症発生率と経膈リンパ管腫瘍に、手術経験と関係するまでに34例を除外した。手術経験が増えるとともに、合併症発生率も増加する。手術経験が増えるとともに、合併症発生率も増加する。
この論文での回答2	キーワード	読み(金角カナルファベット)
Mindsキーワード1	食道癌	シロウドウガン
Mindsキーワード2	VATS	VATS
Mindsキーワード3	胸腔鏡	カクシツ
Mindsキーワード4	経膈リンパ管腫瘍	カクシツ
Mindsキーワード5	合併症	カクシツ
クリニカルエッセイ	この論文での回答3	術者の手術経験
この論文での回答3	キーワード	読み(金角カナルファベット)
Mindsキーワード1	食道癌	シロウドウガン
Mindsキーワード2	VATS	VATS
Mindsキーワード3	術後呼吸器合併症	カクシツ
Mindsキーワード4	合併症	カクシツ
Mindsキーワード5	手術経験	シユジュツカクシツ

レビュー研究用フォーム		データ格納欄	
基本情報	対象疾患 タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル 論文の日本語タイトル	Plastic prosthesis versus expandable metal stents for palliation of inoperable esophageal thoracic carcinoma: a controlled prospective study	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無 ガイドラインでの目次名称	1.有り 2.無し (1) 食道ステント挿入術	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.コホート研究 6.症例対照研究 7.横断研究 8.症例報告 9.その他 (3)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Gastrointest Endosc	
	雑誌 ID		
	巻	43	
	号	5	
	ページ	478-482	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	1996		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	De Palma GD	The Servizio Centralizzato di Endoscopia Digestiva Operatoria. Università Federico II di Napoli, Facoltà di Medicina e Chirurgia, Naples, Italy
	その他著者1	Di Matteo E	
	その他著者2	Romano G	
	その他著者3	Fimmano Antonio	
	その他著者4	Rondinone G	
	その他著者5	Catanzano C	
	その他著者6		
	その他著者7		
	その他著者8		
	その他著者9		
その他著者10			

レビュー研究の6項目	目的	進行食道癌に対する食道ステントとしての plastic prosthesis と expandable metal stent の有効性と合併症を比較検証する。
	データソース	1993年1月より1994年6月までに経腹した食道狭窄を伴う切除不能胸部進行食道癌あるいは胸部再発食道癌計39例をA群(plastic prosthesis)20例とB群(covered expandable metal stent)19例にランダム化割付けた。
	研究の選択 データ抽出	ステント留置成功率、嚥下障害の改善と再発、長期成績、急性期合併症、晚期合併症
	主な結果	1) ステント留置成功率 A群90% B群94.7% (有意差なし) 2) 嚥下障害の改善度 両群間で有意差なし 3) 急性期合併症 A群22% B群0% (p=0.001) 4) 留置後7日以内死亡率 A群17% B群0% (p=0.001) 5) MST A群6.2か月 B群6.6か月 (有意差なし) 6) 晚期合併症 食事によるステント閉塞 A群4例 B群4例 (有意差なし) tube migration A群2例 B群0例 Tumor ingrowth A群0例 B群2例
	結論	切除不能胸部進行食道癌による食道狭窄に対して、expandable metal stent は従来の plastic prosthesis よりも効果は同等でより安全であると考えられる。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	北川雄光
	レビューワーコメント	従来の plastic prosthesis よりも expandable metal stent の方が安全かつ有効であろうという仮説のもとでデザインされた study である。 plastic prosthesis よりも短期合併症は有意に少ないが、 expandable metal stent の晚期障害として代表的な瘻孔形成や穿孔、出血などについては記載がなく、疑問を感じる。全体に expandable metal stent が臨床使用された当初の古い文献であるという感否めない。

レビュー研究用フォーム		データ格納欄	
基本情報	対象疾患 タイプ	食道癌	
タイトル情報	論文の英語タイトル 論文の日本語タイトル	Percutaneous Endoscopic Gastrostomy for Nutrition in Patients with Oesophageal Cancer 食道癌患者に対する栄養目的での経皮内視鏡的胃ろう(PEG)造設術施行の安全性	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無 ガイドラインでの目次名称		
書誌情報	研究デザイン	ランダム化研究	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Eur J Surg	
	雑誌 ID	167	
	巻	11	
	ページ	839-844	
	ISSN ナンバー	1102-4151	
	雑誌分野	医学	
	原本文語	英語	
発行年月	Nov 2001		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Dag Stockeld	Division of General Surgery, Karolinska Institute, Danderyd Hospital, Stockholm
	その他著者1	Jan Fagerberg	Division of Oncology, Same as above
	その他著者2	Lars Granstrom	Division of General Surgery, Same as above
	その他著者3	Lars Backman	Same as above
レビュー研究の6項目	目的	食道癌と診断した患者に対する追加PEG挿入の安全性について検討を行うこと。	
	施設	スウェーデン、カロリンスカ研究所 救急病院	
	対象	1990年1月から1999年12月までに食道癌を患った全229症例	
	方法	食道癌と診断し、治療を開始する前にPEGを胃鏡にて挿入し、手術に伴う合併症発生率、死亡率について検討を行った。	
	主な結果	1. PEGは229例中222例(97%)に施行できた。103例(45%)において挿入時にブジーを置いた。2. 手術に伴う致死性合併症は2例(0.9%)に発生した。1例は食道穿孔、1例は胃穿孔であった。3. PEG挿入による右腎大動脈瘤破裂を1例に認めたが、その他の副腎性症には影響を及ぼさなかった。4. PEGに伴うimplantation metastasisの発症を1例に認めた。5. 4例に口腔感染を、3例にleakageを認めた。	
	結論	食道癌追加挿入の患者に対して十分に安全に栄養目的でPEGを挿入することが可能である。229例中、67例(29%)に対して手術的切除を、84例(37%)に対して根治的集学的治療を行った。	
レビューワーコメント	EBMレビューワー氏名	北川 雄光	
	EBMレビューワーコメント	食道癌追加挿入に十分な安全性に類似にPEGを留置可能であることが示された。食道癌追加挿入にPEGを留置し、経腸栄養を施行することが、実際に、食道癌治療に対する反応や予後にどのような影響を及ぼすかについては、今後、前向きなRCTを施行し、検討する必要があると考えられる。	
クリニカルエッセイ この論文での固言、 Mindキーマード	この論文での回答1	食道癌追加挿入患者に対し、PEGを挿入できるか？	
	キーワード1	229例中222例に挿入可能であった。うち、103例において内視鏡的拡張術を要した。	
	Mindキーマード1	キーワード	飲み(全食カノアルファベット)
	Mindキーマード2	食道癌	ショクドウガン
	Mindキーマード3	内視鏡的拡張術	PEG
クリニカルエッセイ この論文での固言、 Mindキーマード	この論文での回答2	食道癌追加挿入患者に対するPEG挿入に伴う死亡率は？	
	キーワード2	0.9%	
	Mindキーマード1	キーワード	飲み(全食カノアルファベット)
	Mindキーマード2	食道癌	ショクドウガン
	Mindキーマード3	死亡率	シボウリツ
クリニカルエッセイ この論文での固言、 Mindキーマード	この論文での回答3	食道癌追加挿入患者に対するPEG挿入に伴う合併症の頻度と発生件数は？	
	キーワード3	感染(4例)、Leakage(3例)、食道穿孔(1例)、胃穿孔(1例)、implantation metastasis(1)	
	Mindキーマード1	キーワード	飲み(全食カノアルファベット)
	Mindキーマード2	食道癌	ショクドウガン
	Mindキーマード3	合併症	ガッパイショウ

レビュー研究用フォーム		データ記入欄		
基本情報	対象疾患	下部食道・噴門部癌		
	タイプ	臨床専門情報(専門医向け)		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Esophageal stents with antireflux valve for tumors of the distal esophagus and gastric cardia: a randomized trial		
	論文の日本語タイトル	下部食道癌、噴門部癌における逆流防止弁付き self-expandable metallic stent (SEMS)の有効性の検討—ランダム化比較試験—		
診療が伴った情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)		
査読情報	ガイドライン上の目次名称			
	研究デザイン	1. レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.コホート研究 6.症例対照研究 7.横断研究 8.症例報告 9.その他 (3)		
	Pubmed ID			
	医中誌 ID			
	雑誌名	Gastrointest Endosc		
	雑誌 ID			
	巻	60		
	号	5		
	ページ	695-702		
	ISSN ナンバー			
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)		
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
	発行年月	2004		
	著者情報		氏名	所属機関
		筆頭著者	Homs MYV	Department of Gastroenterology and Hepatology, Erasmus MC University Medical Center, Rotterdam
その他著者 1		Wahab PJ		
その他著者 2		Kuipers EJ		
その他著者 3		Steyerberg EW		
その他著者 4		Groot TA		
その他著者 5		Haringsma J		
その他著者 6		Siersema PD	Department of Gastroenterology and Hepatology, Erasmus MC University Medical Center, Rotterdam	
その他著者 7				
その他著者 8				
その他著者 9				
その他著者 10				

レビュー研究の6項目	目的	下部食道癌、噴門部癌における逆流防止弁付き self-expandable metallic stent (SEMS)の有効性を検証する。
	データソース	2002年4月より2003年5月までに経験した切除不能下部食道癌もしくは噴門部癌 計30例を逆流防止弁付き FerX-Ella stent 留置群(15例)と従来の弁無し FerX-Ella stent 留置群(15例)にランダム化。
	研究の選択	
	データ抽出	胃食道逆流、嚥下障害の改善と再発、合併症、予後
	主な結果	1) 胃食道逆流症状は、逆流防止弁付きステント留置群で25%、通常のステント群で14% (有意差なし). 2) 24時間pHモニターでの逆流時間は逆流防止弁付きステント群で23%、通常のステント群で10% (有意差なし). 3) 両群3例ずつ出血、重度の疼痛、誤嚥性肺炎などの合併症が生じた。ステントのmigrationは30例中7例(23%)に生じた。
	結論	逆流防止弁付き FerX-Ella stent は従来の弁無し FerX-Ella stent に比べても胃食道逆流の防止効果はみられなかった。
レビューワーコメント	レビューワー氏名	北川雄光
	レビューワーコメント	ランダム化比較試験ではあるが、各群の症例数が少なく、胃食道逆流の防止効果という primary study outcome としてはインパクトに欠ける内容である。むしろ、ステント留置による合併症が非常に高率であることにも注意すべきである。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄		
基本情報	対象疾患	食道癌		
	タイプ	臨床専門情報(専門医向け)		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Severe complication in advanced esophageal cancer treated with radiotherapy after intubation of esophageal stents: a questionnaire survey of the Japanese Society for Esophageal Diseases.		
	論文の日本語タイトル	食道ステント挿入後に放射線照射を施行した進行食道癌症例における重篤な合併症—日本食道癌研究会アンケート調査報告—		
診療が伴った情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)		
査読情報	ガイドライン上の目次名称			
	研究デザイン	1. レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.コホート研究 6.症例対照研究 7.横断研究 8.症例報告 9.その他 (6)		
	Pubmed ID			
	医中誌 ID			
	雑誌名	Int J Raditation Oncology Biol Phys		
	雑誌 ID			
	巻	56		
	号	5		
	ページ	1327-1332		
	ISSN ナンバー			
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)		
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
	発行年月	2003		
	著者情報		氏名	所属機関
		筆頭著者	Nishimura Y	Dept. of Radiology, Kinki University
その他著者 1		Nagata K	Dept. of Radiology, Kansai Medical Univ.	
その他著者 2		Katano S	Dept. of Radiotherapy, Tochigi Cancer Ctr.	
その他著者 3		Hirota S	Dept. of Radiology, Hyogo Medical Center for Adults	
その他著者 4		Nakamura K	Dept. of Radiology, Kyushu Univ., Faculty of Medical Sciences	
その他著者 5		Higuchi F	Dept. of Radiology, Hiroshima City Hosp.	
その他著者 6		Soejima T	Dept. of Radiology, Kobe Univ. Graduate School of Medicine	
その他著者 7		Sai H	Dept. of Radiation Oncology, Kyoto Univ. Graduate School of Medicine	
その他著者 8				
その他著者 9				
その他著者 10				

レビュー研究の6項目	目的	放射線治療前あるいは治療中に食道ステントを留置された食道癌患者の合併症と予後を検討する
	データソース	Japan Society for Esophageal Diseasesの放射線治療部門47委員へのアンケート(2001年8月). 1990年から2001年までの間に、(化学)放射線治療前あるいは治療中に食道ステントを留置された食道癌患者を対象。 17施設から合計47人の患者についての回答あり。
	研究の選択	アンケートに対する回答がなされている17施設、合計47人の患者を選択。
	データ抽出	患者年齢、性別、Performance status、食道ステント挿入時期、ステント挿入の理由、ステントのタイプ、原発巣占拠部位、長径、肉眼形態、TNM classification、組織型、照射野、照射線量、照射法、併用化学療法の有無と方法、NCI-CTC v2.0非血液毒性の有無、治療効果、照射開始後生存期間、死亡原因
	主な結果	1) Grade 3-5 非血液毒性を認めた患者は24人(51%)。消化管出血が10例(21%)、穿孔・瘻孔形成(悪化)が13例(28%)、肺炎が5例(11%)。治療関連死亡は10例(21%)。 2) 放射線開始から非血液毒性(最大Grade)出現までは16-312日(中央値78日)。 3) 非血液毒性の出現頻度は食道癌群で33%、食道狭窄群で59%(有意差なし)。 4) MSTはStage II, III(合計35例)で5か月、Stage IV(11例)で3.5か月。
	結論	放射線治療前あるいは治療中の食道ステント挿入術は、生命予後に影響を及ぼす重大な合併症を生ずる可能性がある。 特に食道狭窄に対するステント留置は食道圧迫壊死による致命的な穿孔・瘻孔形成や出血を生ずる恐れがある。
レビューワーコメント	レビューワー氏名	北川雄光
	レビューワーコメント	検討された患者数が少ない。また多施設へのアンケートという形で、過去の症例の集積がなされているため、データの質には問題がある。治療プロトコルが存在しないため、患者の治療背景に統一性がない。しかし、放射線治療前あるいは治療中の食道ステント挿入術に対する警鐘の意味では、有意義な論文であると考えられる。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	食道癌	
	タイプ	臨床専門情報(専門医向け)	
タイトル情報	論文の英語タイトル	A randomized trial of thermal ablation therapy versus expandable metal stents in the palliative treatment of patients with esophageal carcinoma.	
	論文の日本語タイトル	食道癌に対する姑息的治療のための self-expandable metal stent と thermal tumor ablation (TTA) therapy のランダム化比較試験	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上での目次名称		
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.コホート研究 6.症例対照研究 7.横断研究 8.症例報告 9.その他 (3)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Gastrointest Endosc	
	雑誌 ID		
	巻	54	
	号	5	
	ページ	549-557	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2001		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Dallal H	GI Unit, Western General Hospital, Edinburgh, UK
	その他著者1	Smith GD	
	その他著者2	Grieve DC	
	その他著者3	Ghosh S	
	その他著者4	Penman ID	
	その他著者5	Palmer KR	
	その他著者6		
	その他著者7		
	その他著者8		
	その他著者9		
その他著者10			

レビュー研究の6項目	目的	切除不能食道癌における食道狭窄解除のための self-expandable metal stent と thermal tumor ablation (TTA) therapy のランダム化比較試験による有効性の検討。
	データソース	単施設に登録された 65 例の切除不能進行食道癌（または切除不能進行食道胃接合部癌）をステント留置群と TTA 群にランダム化。
	研究の選択	
	データ抽出	治療後生存期間, 総治療費, 入院期間, health-related quality of life, 嚥下障害の改善程度
レビューワーコメント	主な結果	1) ステント留置群 31 例中 8 例 (26%), TTA 群 34 例 6 例(18%) に重篤な合併症がみられた。 2) TTA 群で有意に生存期間中央値が延長 (125 日対 68 日), log-rank test (p<0.05) 3) 総治療費, 入院期間はステント留置群の方が優れている。 4) 嚥下障害の改善は両群とも良好ではなかった。ステント留置群の 13%, TTA 群の 21%に嚥下障害の再増悪がみられた。 5) QOL に関してはステント留置群で不良, 特に疼痛はステント群でより重度にみられた。
	結論	切除不能食道癌においてステント留置, TTA はいずれも嚥下障害の改善に優れているとは言えない。ただし, TTA 群はステント留置群に比べ, QOL の維持に優れており, 有意に予後が良好である。
	備考	thermal tumor ablation (TTA) therapy の内訳: Nd YAG laser, argon diode laser, argon plasma coagulation
	レビューワー氏名	北川雄光
	レビューワーコメント	ランダム化比較試験として, データの質, 量ともに信頼性のある論文である。TTA 群はステント留置群に比べ, QOL の維持に優れており, 有意に予後が良好であるものの, 著者は primary study outcome である嚥下障害の改善はあまり期待できないことを強調している。また両治療法とも重篤な合併症を伴うリスクがあり, 新しい姑息的治療法の開発が期待される。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	食道癌	
	タイプ	臨床専門情報(専門医向け)	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Single-dose brachytherapy versus metal stent placement for the palliation of dysphagia from oesophageal cancer: multicentre randomized trial	
	論文の日本語タイトル	食道癌による嚥下障害に対する姑息的治療としての小線源腔内照射と金属ステント留置の比較—多施設共同ランダム化比較試験—	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上での目次名称		
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.コホート研究 6.症例対照研究 7.横断研究 8.症例報告 9.その他 (3)	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Lancet	
	雑誌 ID		
	巻	364	
	号		
	ページ	1497-1504	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	Oct 2004		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Homs MY	Department of Gastroenterology and Hepatology, Erasmus MC/University Medical Centre Rotterdam
	その他著者1	Steyerberg EW	Department of Public Health, Erasmus MC/University Medical Centre Rotterdam
	その他著者2	Eikenboom WMH	Department of Radiotherapy, Erasmus MC/University Medical Centre Rotterdam
	その他著者3	Tilanus HW	Department of Surgery, Erasmus MC/University Medical Centre Rotterdam
	その他著者4	Stalpers LJA	Department of Radiotherapy, Academic Medical Centre, Amsterdam
	その他著者5	Bartelsman FWM	Department of Gastroenterology, Academic Medical Centre, Amsterdam
	その他著者6	van Lanschot JJB	Department of Surgery, Academic Medical Centre, Amsterdam
	その他著者7	Wijrdeman HK	Department of Gastroenterology, Rijnstate Hospital, Arnhem
	その他著者8	省略	
	その他著者9	省略	
その他著者10	Siersema PD	Department of Gastroenterology and Hepatology, Erasmus MC/University Medical Centre Rotterdam	

レビュー研究の6項目	目的	食道癌あるいは食道胃接合部癌により生じた食道狭窄に対する, 姑息的治療としての小線源腔内照射と金属ステント留置をランダム化比較し, 合併症と QOL を検討する。
	データソース	1999 年 12 月より 2002 年 6 月まで, 9 施設で登録された切除不能進行食道癌, あるいは切除不能進行食道胃接合部癌患者 209 例を小線源腔内照射群と金属ステント留置群にランダム化。
	研究の選択	
	データ抽出	health-related quality of life, visual analogue pain scale, total medical cost
レビューワーコメント	主な結果	1) ランダム化により, 小線源腔内照射群 101 例 (95 例で完遂), 金属ステント留置群 108 例 (105 例で留置可能)。 2) 嚥下困難は金属ステント群で速やかに改善されたものの, 長期成績は小線源腔内照射群で有意に良好であった。 3) 合併症発生率は, 金属ステント群で有意に高かった (33% vs 21%; p=0.02)。特に後出血の頻度が金属ステント群で有意に高かった (13% vs 5%; p=0.05)。 4) 生存期間や嚥下困難の再発頻度, 総治療費については両群間に差がなかった。 5) QOL スコアは, 概ね小線源腔内照射群で良好であり, 特に治療後の疼痛は小線源腔内照射群で少ない傾向であった。
	結論	食道癌あるいは食道胃接合部癌により生じた食道狭窄に対する姑息的治療としての小線源腔内照射は, 長期間嚥下困難の改善をもたらす。小線源腔内照射は, 金属ステント留置よりも合併症頻度が有意に少なく, 狭窄解除のための姑息的治療として有用である。
	備考	
	レビューワー氏名	北川雄光
	レビューワーコメント	ランダム化比較試験として, データの質, 量ともに信頼性のある論文である。食道狭窄解除のための姑息的治療としての小線源腔内照射を評価する意味で, また安易な金属ステント留置に対する警鐘の意味で重要な論文と考える。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	食道癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Surgical resection with or without preoperative chemotherapy in oesophageal cancer: A randomised controlled trial.	
	論文の日本語タイトル	食道癌に対する手術単独と術前化学療法後の手術のランダム化比較試験	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り	
	ガイドライン上の目次名	術前補助療法	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.コホート研究 6.症例対照研究 7.横断研究 8.症例報告 9.その他 (3)	
	Pubmed ID	12049861	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Lancet.	
	雑誌 ID		
	巻	359	
	号		
	ページ	1727-1733	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ()	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ()		
発行年月	May 2002		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Medical Research Council Oesophageal Cancer Working Group	Medical Research Council Clinical Trial Unit
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

レビュー研究の6項目	目的	切除可能食道癌に対する術前化学療法の有効性の確認
	データソース	802名の未治療切除可能食道癌、組織型は問わない。
	研究の選択	術前化学療法の有無のランダム化比較試験
	データ抽出	シスプラチン(80mg/m2)、5FU(1000mg/m2 x 4d)の術前化学療法 2コース後の切除 400例と、切除単独 402例のランダム化比較、両群とも9%は術前照射の併用あり。扁平上皮癌 31%、腺癌 66%、未分化癌 3%。
	主な結果	治療切除率は術前照射群 60%に対して、手術単独群 54% (p<0.0001)、術後合併症は同等。2年生存率はそれぞれ 43%と 34%で、全生存率はハザード比 0.79 で術前照射群が有意に良好 (p=0.004)であった。この効果は組織型に依存しなかった。
結論	シスプラチン(80mg/m2)、5FU(1000mg/m2 x 4d)の術前化学療法 2コースでの切除は、切除単独に比較して合併症を増加することなく生存率を有意に向上させる。	
備考		
レビューコメント	レビューワー氏名	西村恭昌
	レビューワーコメント	両群とも9%は術前照射の併用があったが、術前化学療法の組織型によらない有効性を示したイギリスでの大規模ランダム化比較試験である。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	食道癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Neoadjuvant or adjuvant therapy for resectable esophageal cancer: a systematic review and meta-analysis.	
	論文の日本語タイトル	切除可能食道癌に対する術前および術後補助療法のシステマティックレビューとメタアナリシス	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り	
	ガイドライン上の目次名	術前補助療法、術後補助療法	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタ分析 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.コホート研究 6.症例対照研究 7.横断研究 8.症例報告 9.その他 (2)	
	Pubmed ID	15447788	
	医中誌 ID		
	雑誌名	BMC Med	
	雑誌 ID		
	巻	2	
	号	1	
	ページ	35	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ()	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ()		
発行年月	Sept. 2004		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Malthaner RA	The Gastrointestinal Cancer Disease Site Group of Cancer Care Ontario's Program in Evidence-based Care.
	その他著者 1	Wong RKS	
	その他著者 2	Rumble RB	
	その他著者 3	Zuraw L	
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

レビュー研究の6項目	目的	エビデンスに基づく治療を行なうための切除可能食道癌に対する術前および術後補助療法のシステマティックレビューとメタアナリシス
	データソース	MEDLINE (1966-2003), CANCELIT (1983-2001), Cochrane Library (2003, Issue 3), EMBASE(to week 40, 2003), および ASCO (1997-2003) と ASTRO (1999-2002) の抄録
	研究の選択	切除可能胸部食道癌に対する術前および術後補助療法のランダム化比較試験あるいはメタアナリシスを検索した。
	データ抽出	34 報のランダム化比較試験と 6 報のメタアナリシスが抽出され、13 の治療法に分類された。
	主な結果	1) 切除単独に比較して術前照射(ランダム化比較試験 5 報)、術後照射(ランダム化比較試験 5 報)、術前化学療法(ランダム化比較試験 6 報)、術前・術後化学療法(ランダム化比較試験 2 報)、術前化学放射線療法(ランダム化比較試験 6 報)は 1 年生存率を向上させない。2) 切除単独に比較して術後化学療法(ランダム化比較試験 2 報)は、3 年生存率を向上させない。3) 切除単独に比較して術前化学放射線療法は(ランダム化比較試験 6 報)は 3 年生存率を向上させる。
結論	成人の切除可能胸部食道癌に対しては、切除単独が標準治療として推奨される。	
備考		
レビューコメント	レビューワー氏名	西村恭昌
	レビューワーコメント	わが国で行なわれた術後化学療法の JCOG9204 試験は、全生存率で有意差が示されなかったため、negative trial とされている。術前化学放射線療法は 3 年生存率を向上させると結論しながら、全体としては切除単独を標準治療として推奨している。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	食道癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Neoadjuvant treatment for resectable cancer of the esophagus and the gastroesophageal junction: a meta-analysis of randomized clinical trials.	
	論文の日本語タイトル	切除可能食道癌に対する術前補助療法のメタアナリシス	
診療科/科/科情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り	
	ガイドライン上の目次名称	術前補助療法	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタアナリシス 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.コホート研究 6.症例対照研究 7.横断研究 8.症例報告 9.その他 (2)	
	Pubmed ID	12900366	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Ann Surg Oncol	
	雑誌 ID		
	巻	10	
	号	7	
	ページ	754-761	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ()	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ()	
	発行年月	Aug 2003	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Kaklamanos IG	Surgical Oncology, Univ. of Miami, Florida
	その他著者 1	Walker GR	BioStatistics, Univ. of Miami, Florida
	その他著者 2	Ferry K	Surgical Oncology, Univ. of Miami, Florida
	その他著者 3	Franceschi D	Surgical Oncology, Univ. of Miami, Florida
	その他著者 4	Livingstone AS	Surgical Oncology, Univ. of Miami, Florida
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

レビュー研究の6項目	目的	メタアナリシスによって切除可能食道癌に対する術前補助療法の有効性を明らかにする。
	データソース	MEDLINE, CANCELIT, Index Medicus, 1960年から2002年
	研究の選択	切除可能胸部食道癌に対する術前および術後補助療法のランダム化比較試験あるいはメタアナリシスを検索した。
	データ抽出	すでに論文として公表された切除単独を標準治療とする術前補助療法の11報のランダム化比較試験(2311症例)が抽出され分析された。
	主な結果	1) ランダム化比較試験7報をもとに、切除単独と比較して術前化学療法は2年生存率が4.4%向上させる(p=0.07)。 2) ランダム化比較試験5報をもとに、切除単独と比較して術前化学放射線療法は2年生存率が6.4%向上させるが有意差ではない。 3) 術前化学療法および術前化学放射線療法は手術関連死亡率をそれぞれ1.7%および3.4%増加させる。
	結論	切除可能胸部食道癌に対しては、切除単独と比較して術前化学療法によるわずかな生存率の向上が期待できる。一方、術前化学放射線療法は治療関連死亡率が上昇する。
レビューワーコメント	レビューワー氏名	西村恭昌
	レビューワーコメント	2年生存率をエンドポイントとして、術前補助療法、特に術前化学の有効性を示唆している。一方、術前化学放射線療法は治療関連死亡率が向上するとしている。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	食道癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	A meta-analysis of randomized controlled trials that compared neoadjuvant chemoradiation and surgery to surgery alone for resectable esophageal cancer	
	論文の日本語タイトル	切除可能食道癌に対する術前化学放射線療法と手術単独のランダム化比較試験のメタアナリシス	
診療科/科/科情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り	
	ガイドライン上の目次名称	術前補助療法	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタアナリシス 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.コホート研究 6.症例対照研究 7.横断研究 8.症例報告 9.その他 (2)	
	Pubmed ID	12781882	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Am J Surg	
	雑誌 ID		
	巻	185	
	号	6	
	ページ	538-543	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ()	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ()	
	発行年月	Jun 2003	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Urschel JD	Dept of Surgery, McMaster Univ., Canada
	その他著者 1	Vasan H	Dept of Surgery, McMaster Univ., Canada
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

レビュー研究の6項目	目的	切除可能食道癌に対する術前化学放射線療法の生存率と手術関連死亡率とのメタアナリシス
	データソース	MEDLINE と manual search で2002年11月に検索した。
	研究の選択	切除可能胸部食道癌に対する切除単独と術前化学放射線療法のランダム化比較試験を検索した。
	データ抽出	合計1116症例を含む9報のランダム化比較試験が抽出された。
	主な結果	1) 切除単独と比較して術前化学放射線療法は、1年および2年生存率は有意に向上させなかったが、3年生存率は有意に向上させる(オッズ比0.47, p=0.016)。特に同時化学放射線療法で3年生存率の向上が著明であった。 2) 切除単独と比較して術前化学放射線療法は有意に切除率、完全切除率を向上させ、局所再発率(オッズ比0.38, p=0.0002)も低下させる。 3) 切除単独と比較して術前化学放射線療法は手術関連死亡率を上げる(オッズ比1.72, p=0.07)。
	結論	切除可能胸部食道癌に対する術前化学放射線療法は、切除単独と比較して3年生存率と局所制御率を有意に向上させるが、手術関連死亡率も上げる。術前化学放射線療法において、順次化学放射線療法よりも同時化学放射線療法が有効である。
レビューワーコメント	レビューワー氏名	西村恭昌
	レビューワーコメント	1年および2年生存率では有意な向上は見られないが、3年生存率をエンドポイントとすると、術前化学放射線療法は切除可能胸部食道癌の生存率を向上させるとのメタアナリシス。ただし、手術関連死亡率も上がる。術前化学放射線療法において、順次化学放射線療法よりも同時化学放射線療法が有効である。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	食道癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Preoperative chemoradiotherapy for oesophageal cancer: a systematic review and meta-analysis.	
	論文の日本語タイトル	食道癌に対する術前化学放射線療法: システマティックレビューとメタアナリシス	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1. 有り	
	ガイドライン上の目次名称	術前補助療法	
書誌情報	研究デザイン	1. レビュー 2. メタアナリシス 3. ランダム化比較試験 4. 非ランダム化比較試験 5. ノット研究 6. 症例対照研究 7. 横断研究 8. 症例報告 9. その他 (2)	
	Pubmed ID	15194636	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Gut	
	雑誌 ID		
	巻	53	
	号	7	
	ページ	925-930	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1. 医学 2. 歯学 3. 看護 4. その他 ()	
	原本言語	1. 日本語 2. 英語 3. ドイツ語 4. その他 ()	
	発行年月	Jul 2004	
	著者情報		氏名
筆頭著者		Florica F	Radiation Oncology, Univ. of Modena e Reggio Emilia, Italy
その他著者 1		Di Bona D	
その他著者 2		Schepis F	
その他著者 3		Licata A	
その他著者 4		Shahied L	
その他著者 5		Venturi A	
その他著者 6		Falchi AM	
その他著者 7		Craxi A	
その他著者 8		Camma C	
その他著者 9			
その他著者 10			

レビュー研究の6項目	目的	エビデンスに基づく診療を行なうための切除可能食道癌に対する術前化学放射線療法のシステマティックレビューとメタアナリシス
	データソース	MEDLINE と CANCERLIT で 2002 年 12 月までに発表された論文を検索した。
	研究の選択	遠隔転移のない組織学的に悪性が証明された切除可能胸部食道癌に対する切除単独と術前化学放射線療法のランダム化比較試験を検索した。
	データ抽出	6 報のランダム化比較試験が抽出された。
	主な結果	1) 切除単独に比較して術前化学放射線療法は 3 年生存率を有意に向上させる(オッズ比 0.53, p=0.03), 2) 切除単独に比較して術前化学放射線療法は有意に病期改善(down staging)する(オッズ比 0.43, p=0.001), 3) 切除単独に比較して術前化学放射線療法は手術関連死亡率を有意に上げる(オッズ比 2.1, p=0.01).
	結論	切除可能胸部食道癌に対する術前化学放射線療法は、切除単独に比較して 3 年生存率を有意に向上させるが、手術関連死亡率も有意に上げる。術前化学放射線療法の生存率に対するはっきりとした有効性を示すには、より大規模なランダム化比較試験が必要である。
備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	西村恭昌
	レビューワーコメント	3 年生存率をエンドポイントとすると、術前化学放射線療法は切除可能胸部食道癌の生存率を向上させるとのメタアナリシス。ただし、手術関連死亡率も有意に上げるので、術前化学放射線療法の生存率に対するはっきりとした有効性を示すには、より大規模なランダム化比較試験が必要である。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	食道癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Neoadjuvant chemoradiotherapy for esophageal carcinoma: a meta-analysis.	
	論文の日本語タイトル	食道癌に対する術前化学放射線療法のメタアナリシス	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1. 有り	
	ガイドライン上の目次名称	術前補助療法	
書誌情報	研究デザイン	1. レビュー 2. メタアナリシス 3. ランダム化比較試験 4. 非ランダム化比較試験 5. ノット研究 6. 症例対照研究 7. 横断研究 8. 症例報告 9. その他 (2)	
	Pubmed ID	15674197	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Surgery	
	雑誌 ID		
	巻	137	
	号	2	
	ページ	172-177	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1. 医学 2. 歯学 3. 看護 4. その他 ()	
	原本言語	1. 日本語 2. 英語 3. ドイツ語 4. その他 ()	
	発行年月	Feb 2005	
	著者情報		氏名
筆頭著者		Greer SE	Dept of Surgery, Dartmouth-Hitchcock
その他著者 1		Goodney PP	Medical Center, Lebanon
その他著者 2		Sutton JE	
その他著者 3		Birkmeyer JD	
その他著者 4			
その他著者 5			
その他著者 6			
その他著者 7			
その他著者 8			
その他著者 9			
その他著者 10			

レビュー研究の6項目	目的	切除可能食道癌に対する術前化学放射線療法の効果を明らかにするためのメタアナリシス
	データソース	MEDLINE, Cochrane Database, BIOSIS Previews で 1966 年から 2003 年 1 月まで検索した。
	研究の選択	切除可能胸部食道癌に対する切除単独と術前化学放射線療法のランダム化比較試験を検索した。
	データ抽出	合計 738 症例を含む 6 報のランダム化比較試験が抽出された。
	主な結果	1) 5 報のランダム化比較試験では切除単独に比較して術前化学放射線療法は、有意ではないものの生存率を向上させ、1 報のランダム化比較試験では有意に生存率を向上させた。 2) 生存率曲線のハザード比をエンドポイントとするメタアナリシスの結果、術前化学放射線療法は有意な傾向をもって長期生存率を向上させた(p=0.07).
	結論	切除可能胸部食道癌に対する術前化学放射線療法は、切除単独に比較して長期生存率をわずかに有意な傾向で向上させる。術前化学放射線療法にはリスクもあり、この有効性を明確に示すには、より大規模なランダム化比較試験が必要である。
備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	西村恭昌
	レビューワーコメント	生存率曲線のハザード比をエンドポイントとするメタアナリシスの結果、術前化学放射線療法は有意な傾向(p=0.07)をもって長期生存率を向上させたというメタアナリシス。結論は決定的ではない。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患 タイプ	食道癌	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Surgery plus chemotherapy compared with surgery alone for localized squamous cell carcinoma of the thoracic esophagus: a Japan Clinical Oncology Group Study-JCOG9204.	
	論文の日本語タイトル	転移のない食道扁平上皮癌に対する手術単独と術後化学療法併用のランダム化比較試験、JCOG9204	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無 ガイドライン上での目次名称	1.有り 術後補助療法	
書誌情報	研究デザイン	1.レビュー 2.メタアナリシス 3.ランダム化比較試験 4.非ランダム化比較試験 5.コホート研究 6.症例対照研究 7.横断研究 8.症例報告 9.その他 (3)	
	Pubmed ID	14673047	
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Clin Oncol	
	雑誌 ID		
	巻	21	
	号	24	
	ページ	4592-4596	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ()	
原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ()		
発行年月	Dec 2003		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Ando N	Dept of Surgery, Keio Univ. School of Medicine, Japan
	その他著者 1	Iizuka T	
	その他著者 2	Ide H	
	その他著者 3	Ishida K	
	その他著者 4	Shinoda M	
	その他著者 5	Nishimaki T	
	その他著者 6	Takiyama W	
	その他著者 7	Watanabe H	
	その他著者 8	Isono K	
	その他著者 9	Aoyama N	
その他著者 10	Makuuchi H		

レビュー研究の6項目	目的	根治的切除した食道癌に対する術後化学療法の有効性の確認
	データソース	242名の食道扁平上皮癌
	研究の選択	術後化学療法の有無のランダム化比較試験
	データ抽出	食道扁平上皮癌に対する根治的切除後にシスプラチン(80mg/m ²), 5FU(800mg/m ² x 5d)の術後化学療法 2 コースを行なった 120 例と、切除単独 122 例のランダム化比較。
	主な結果	術後化学療法は 75%に対して予定通りの化学療法の投与が行なえ、grade 3,4の毒性はわずかであった。5年無再発生存率は、手術単独群 45%に対して、化学療法群では 55%と有意に良好であった (p=0.037)。5年全生存率はそれぞれ 52%と 61%で、全生存率には有意差が認められなかった (p=0.13)。リンパ節転移を有する症例で無再発生存率の改善が顕著であった。
	結論	シスプラチン(80mg/m ²), 5FU(800mg/m ² x 5d)の術後化学療法 2 コースは、切除単独と比較して合併症を増加することなく無再発生存率を向上させる。
備考		
レビューコメント	レビューワー氏名	西村恭昌
	レビューワーコメント	術後化学療法が切除食道癌の無再発生存率を向上させることを示したわが国で行なわれたランダム化比較試験である。ただし、全生存率での差は有意でなかった。なお本試験のプライマリーエンドポイントは無再発生存率であり、全生存率は二次的なエンドポイントである。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患 タイプ	食道癌 臨床専門情報 (専門医向け)	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Concurrent chemoradiotherapy with protracted infusion of 5-FU and cisplatin for postoperative recurrent or residual esophageal cancer	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無 ガイドライン上での目次名称	1.有り 再発治療・文献 8	
書誌情報	研究デザイン	6. 症例対照研究	
	Pubmed ID	12949060	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Jpn J Clin Oncol	
	雑誌 ID		
	巻	33	
	号	7	
	ページ	341-345	
	ISSN ナンバー	0368-2811	
	雑誌分野	1.医学	
原本文語	2.英語		
発行年月	2003		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Nishimura Y	Department of Radiology, Kinki University School of Medicine
	その他著者 1	Koike R	
	その他著者 2	Nakamatsu K	
	その他著者 3	Kanamori S	
	その他著者 4	Suzuki M	Department of Radiology, Kinki University School of Medicine/Radiation Oncology Research Laboratory, Research Reactor Institute, Kyoto University
	その他著者 5	Shigeoka H	Department of Surgery, Kinki University School of Medicine
	その他著者 6	Shiozaki S	
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

レビュー研究の6項目	目的	食道癌術後再発・遺残に対する化学放射線同時併用療法の feasibility と効果を明らかにする。
	データソース	1998~2002年における食道癌術後の局所リンパ節再発16例と遺残2例。Low-dose 5-FU+CCDDPによる化学療法と30Gyの放射線照射(3週間)を1コースとして、1週間の休止をはさんで2コースの治療(計60Gy)が行われた。
	研究の選択	
	データ抽出	
	主な結果	18例中13例が治療完遂した。60Gyの照射は2例を除いた16例に施行された。5例に抗がん剤の減量が必要であった。副作用はgrade3の血液学的毒性が高頻度に見られたが、Grade3以上の非血液学的毒性はまれであった。18例中5例(28%)にComplete Responseが得られた。前治療がない場合では、CR率は40%であった。遠隔転移のない13例の2年生存率は19%、Median Survival Timeは9.5ヶ月であった。
	結論	術後再発・遺残食道癌に対する化学放射線同時併用療法は feasibleかつ有効である。
備考		
レビューコメント	レビューワー氏名	藤 也寸志
	レビューワーコメント	食道癌に対する、いわゆる low dose FP療法と放射線の同時併用療法の治療成績である。対象を非切除症例は含まず、術後の再発・遺残症例に限定している。MST9.5ヶ月で2年生存率が19%であり良好とは言えないが、食道癌術後再発・遺残に対する治療の現状を明らかにした報告である。遠隔転移がない局所リンパ節再発の場合は、化学放射線同時併用療法により、長期生存が得られる可能性があることも示しており、有用な研究である。